
帝國自衛隊

あああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝國自衛隊

【Nコード】

N3352Y

【作者名】

あああ

【あらすじ】

史実とは異なる平行世界。

電波を利用した索敵装置の開発を命じられた第一調査小隊の面々は、異世界から訪れた日本人たちとの接触を経て、誰も知らない帝國の勝利を実現するために行動を開始する。

絶望的なまでの未来に向けて突き進む彼らは、太平洋戦争に勝利することが出来るのか？

※この小説は自サイトである極東士官学校で掲載していたものの転

載になります。元のサイトの管理パスワード失念に伴い、にじふア
ンに転載を開始しました※

第一話『第一調査小隊』（前書き）

この作品はかつて運営していた『極東士官学校』で連載していた作品を転載したものです。

管理パスワードを紛失し、当時のプロバイダーを解約し、それでもサイトが存続し続けていたために転載を控えていた作品です。

しかしながら、最近になって続きのアイデアが浮かんできたため、にじファンにて続投を決意致しました。

第一話『第一調査小隊』

元号が大正から昭和へと変わった最初の年、大日本帝國陸軍にある特務部隊が創設された。

陸軍参謀本部直属、第一調査小隊

表向きの発表では、国内の不穏な動きを探るために創設された事になっている。

しかし、書類上は小隊を名乗ってはいるが、その規模はわずか四人。

分隊の定員すら下回る人数であるこの小隊の本当の仕事は、その名前からかけ離れたものだった。

「新兵器の開発？聞いていた話と違いますが」

この小隊の隊長である高橋大介少佐が質問している相手は、彼の直属の上司にして帝国陸軍大佐の佐藤大輔である。

実戦を経験していることを示す大きな傷を頬に付けてはいるが、飽食を示すかなりの肥満体でもある人物だ。

「おや、君は既に気がついていないかと思っていたがな、少し失望したぞ」

本当に失望したような顔をした大佐が、嫌な笑みを顔に浮かべつつ言う。

「はっ、申し訳ありません」

慌てて視線を上に向け、敬礼をする大介。

本来ならば、上官にこのような顔をさせた時には慌てて調子を合わせるべきである。

しかし、彼はこの大佐の調子に乘せられるとろくな目に合わない事を各地の同期から聞いていた。

気をつけろよ俺、絶対に目を合わせるな、話も聞くな。まだ死ぬには早いだろう？

内なる彼が警告する。

しかし、その警告は遅すぎた。

「ほう、悪いと思っているのなら行動で示してもらおうか」

「は？」

思わず視線が落ちる。

そこには、満面の笑みを浮かべた大佐の笑顔があった。

「君に電波を利用した索敵兵器の試作を命令する。期限は一週間。君と君の部下達を最大限に使い」

いきなり大佐は具体的な命令を発した。

「はあ」

当然ながら驚いた少佐はまともな回答を返せない。

その間にも大佐は話を続ける。

「この作戦に対して会計課は一切関与しない。君達が餓死しようと我々は知らん」

「はあ」

「与えられる予算は今から渡す書類に書いてある。それ以外は、びた一文ださんからそのつもりで」

引き出しの中から書類用封筒を出す大佐。それには『軍機』と書かれていた。

「話は以上だ。帰ってよろしい」

注意していたにもかかわらず、大佐のペースに乗せられてしまった少佐は、次第に表情を引きつらせつつも封筒を持って退出した。小隊に割り当てられた部屋に戻った少佐は、ひとまず書類を見てみることにした。

彼の部下達は例によって全員遅刻しており、規律という言葉をどこかに忘れてきた彼らがやってくるまでにはかなりの時間的余裕がある。

さっそく少佐は封筒の中身を取り出し、具体的な命令内容を確認し始めた。

彼は書類に記された予算額を見てニヤけ、ついで任務の内容にあれこれと考える顔をし、そして最後に大佐の手書きで添えられたメッセージを見て顔を蒼ざめさせた。

「やるしか、ないか・・・」

ようやく全てに目を通した彼が呟いた時、太陽は南中に入ろうとしていた。

「おはようございます、遅れました」

午後二時を回ったころ、最後の遅刻者が現れた。

「遅い！また貴様が最後だ！」

隊長用の机に腰掛けて腕を組みながら大介が怒鳴る。

この部屋は、12畳ほどの比較的大きな部屋で長方形をしている。壁の中央にあるドアから見て、一番奥の窓の手前に小隊長席がある。

そして、小隊長席から手前にかけて左右に机が四つ並んでいる。中央に空いた通路には、読みかけの資料や趣味の読み物、よくわからないガラクタ等が乱雑に詰まれ、歩くことが非常に困難になっている。

「まあまあ隊長、特に仕事があるわけじゃ・・・」

「ないでしょう？」

と、いつものように言おうとした最後の遅刻者、柴田和也が日ごろとはかなり違う空気の室内に気がつく。

「あのー、なんか空気重くないですか？」

恐る恐る大介に尋ねる。

「まあな」

対する大介は素っ気無い。

大介がそのような態度になるのかもしれない。

何しろ渡された指示書には電波を使用して敵の位置を探る兵器『電波索敵装置』を開発しなければならないこと、そしてそれが達成できなかった場合、彼らは揃って北海道最北端の警備施設に回されるということが書かれていたのだ。

「それはあんまりですよ……まさか、この部隊の設立理由って……」

徴用前は科学者や技術者の集まりであるこの小隊の設立理由によろやく気がつく柴田。

「そう、初めから大佐は我々にこんな事をさせる気でこの小隊を作ったんだ」

苦々しい顔で大介。

「まあ予想できないわけではないけどな。大体、小隊長が少佐なんて特務部隊にしてもおかしいとは思っていたんだ」

部屋の左側の机の上に座って紅茶を飲んでいた男、岡村継が言う。

「え？みんな気がついていたんですか？なんだ、ならもっと早く言えよよかった」

右側の机に座っていた小柄な男、斎藤弘之が言う。

「さて、全員が揃ったところで再び会議を始めよう。

この電波索敵装置……名前が長いな、電索とでも言っておこう。電索は、具体的にはこちらから電波を発射してその電波に敵が接

触して起きる反応を確認する装置だ。

問題は、その反応をどのようにして感知するかという事。いかに高出力の電波を出すかと言う事。

そして、いかに遠くの敵を察知できるようにするかと言う事だ」

ドアから見て左側の壁に掛かっている黒板になにやら図を書き始める大介。

「諸君らも知っての通り電波とは直進するものだ。基本的にこの原理を変える事はできない。そして、電索は電波を使用する以上この法則を無視する事が出来ない」

船のつもりらしい下手な絵のマストの上に印をつける。

「これを電索と思って欲しい。ここに電索があると仮定し、さらに出力を無制限に取ってやる。すると……」

黒板の左側にある水平線と書かれた歪んだ線までの間をチョークで雑に埋める。

「大体これくらいの幅全てに、満遍なく対空監視員を置いたのと同じ効果が得られるわけだ。

しかもこの監視員は寝ないし、間違えないし、濃霧立ち込める時も、明かり一つない新月の夜も必ず敵を発見してくれる」

興奮したらしく、近くにあった斎藤の紅茶を一口飲んだ。

「すまん、すこし興奮してしまった……さて、この電索だが、水平線上の物までしか探知できない」

「何故ですか？」

柴田が不思議そうな声を出す。

「さっき言っただろうが、電波は直進しか出来ん。従って水平線を越える事はできん」

「あ」

しまったと言う顔をする柴田。

「人の話はちゃんと聞け・・・で、次にどのようにしてその反応を探知するかだ、これについて何か意見があるものはいるか？」

大介が意見をもとめると、岡村が直ぐに手をあげた。

「少し前に八木博士が開発したアンテナがあるだろう？ あれは使えないか？」

今度は大介が「あ」と言う番だった。

腐っても技術者。

一度でも「これは使えるかもしれない」と判断した物は、いざというときに備えて記憶し、そして必要な時に必要な情報が出てくる。それは技術者として

「確かにあれは使えるそうだな、いや、『使える』な」

断言する大介。

「直ぐに用意させよう、どうやって探知した物を表すかは斎藤と柴

田に任せる。

俺と岡村は効率のいい発信・受信装置を作る。期限は3日。それを越えたら計画はきつくなるぞ。各員の健闘を祈る。直ぐに作業を開始しろ！」

大介の号令と共に全員が各々の仕事に取り掛かった。

次の日から作業は始まった。

より正確には昨日から始まっていたのだが、昨日の場合はひたすら電話をかけて注文を取っていた位なので厳密には作業とは言わない。

しかし、彼らの偉業の一ページ目が、実は昨日行われたのだ。

当時、各企業に連日のように自称発明家が押し寄せており、多少の法螺ならば余裕を持って撃退していた審査官にとって、八木と言う博士の持ってきた電波の受信率が格段に上がるアンテナはハッタリにしか見えなかったらしく、博士は速攻で会社を追い出された。

（やはり外国企業に売るしかない）と八木博士が決断しかけた時、奇跡は起きた。

彼の家にいままで彼の事を追いついた会社の重役達が現れ、口々にアンテナの特許を売ってくれと言いつ出したのだ。

大介達が各社へ「八木アンテナは売ってるか？売ってるならあるだけ売ってくれ」と電話したからである。

これを軍需産業への一步と認識した各社は、こぞってこの利益にあやかろうと行動を開始した、というわけだ。

警察官が静止に踏み切るほどの大騒ぎの後、アンテナの特許権は博士が持ったままで、売上に対して一定の使用量を払いつつ三菱財

閥が販売権を握る事で決着がついた。

量産ではなく試作ということで、翌日には銀座の施設に試作品の八木アンテナ2基と、その他必要物資が届けられた。

「・・・・・・・・・・よし！できた！」

全高10mと言う巨大な装置を見上げながら大介が言う。

「早速試運転をしてみましょう！」

斎藤が蒸気動力機を動かす。

蒸気を噴出しながら電索が徐々に動き出す。

メーターの値が次々と必要な所まで動いていき、特殊な構造のガラスに反応があったことを示す光点が浮かび上がる。

「えーと・・・十二時の方向！約200m、一つです」

それを見ていた柴田が叫ぶ。

その声にしたがって他の全員が上空を見る。

「・・・・・・・・・・あった！ありました！！！」

岡村が指差す方向を見ると、陸軍省が揚げた一機の気球が上空を漂っていた。

「やった！！実験は成功だ！！！」

大介が拳を突き上げる。

しかし、その瞬間上空が突然曇りだし、雷鳴が轟き始めた。

「な、なんだ？ どうなっ・・・」 「たいへんですっ！！」

突然の事態に大介が漏らした呟きは、機械のそばにいた斎藤の叫びがかき消した。

「どうした！？」

その声の異常さに気がついた大介達が電策のそばに駆けつける。

「出力が下がりません！」

バルブを回したり、レバーを下げたりしながら斎藤が叫ぶ。

「そんな馬鹿な！？ 安全弁は？」

「すでに開いてあります！ もう直ぐ圧力が限界になります！！」

その叫びを聞いた他の研究員達が思わず動力機から離れる。

「怯えている場合じゃない！ 何とかしろ！」

設計図を片手に装置を点検しながら大介が叫ぶ。

その叫びを聞いた他の研究員達は我に帰ったように慌てて装置に取り付いた。

しかし、大介達の健闘もむなく装置の出力は上昇を続けた。

圧力計のレッドゾーンに針が入ったのを見た大介はどうとう装置をあきらめる事を決定した。

「全員装置から離れろ！もうだめだ！」

装置に取り付いていた研究員達が蜘蛛の子を散らすように離れていく。

「早くしろ！」

装置の上に登っていた柴田が慌てて梯子を降りるのを見た大介が叫ぶ。

「わ、わかってます」

振動を始めた装置を恐怖の表情で見ながら柴田が答える。

地面まで残り2mあたりまで来ると、柴田は梯子から飛び降りて全力疾走を始めた。

振り向いてみると動力機からは蒸気が漏れ始めている。

「後ろを振り向くんじゃない！走れ！！」

大介達が叫ぶ。

そして、装置は爆発した。

轟音、煙、そして大量の水蒸気。

「おーい！全員生きてるか？」

動力機が爆発した影響であたりに立ち込める蒸気を手で振り払いながら大介が叫ぶ。

次第に晴れていく蒸気の中から次々と研究員達が挙手しながら出てくる。

どれも顔に煤がついていたり髪の一部が焼けていたりするが怪我は無いようだ。

「!!!? 小隊長殿! あれは!?!」

爆発に気づいて駆けつけた兵士が銃を構えながら叫ぶ。

「え?」

兵士の視線を辿ってみると、完全に大破した装置が……

「あ!?! なんだあれは!?!」

そこには見たことも無いトラックが停車していた。

そのトラックは灰色に緑を混ぜたような極めて目立たない色をしていた。

全長が見た感じ9 mほどで高さが3 m近くもあった。

荷台には幌が張られ、所々に半透明の覗き窓らしき物がある。

大介は失われた電索の事を忘れてそのトラックに見入った。

他の研究員も同様だ。

「気をつけろ、二人続け」

いち早く我に帰った衛兵が銃を構えながらトラックに近づいていく。

「お、おい、うかつに撃つなよ」

大介が恐る恐る声をかける。

「分かっております」

いいながら運転席のドアに手を掛ける衛兵。

しかし、彼があける数秒前、ドアが勢いよく開いた。

「うわっ!!」

開いたドアに直撃して倒れこむ衛兵。

倒れこんだ勢いで小銃が地面へと転がる。

「展開しろ!」

さまざまな色の緑が混ざっている服を着た男が見たこともない銃を構えながらドアから飛び降りると、倒れていた衛兵の首筋に銃を押し当てる。

「動くんじゃねえぞ!! 動きやがったらこいつを殺す!」

男が牽制している間にも後部から次々と同じ格好の男達が小銃らしき物を構えながらトラックの周りに円を書くように展開する。

高度に訓練されているらしく、その動きには隙が無かった。

「やるな」

大介が顎に手をやりながら感心したように言う。

「感心している場合じゃ無いでしょう?」

そういう自分も現状を楽しんでいるような柴田が耳打ちする。

「連中は何者だと思う？」

斎藤が横にいる岡村に言う。

「さあ？ まあ我が軍ではないことは確かだな」

岡村が答える。

「少佐、どうするんです？ 戦うんですか？」

慌てて駆けつけた他の衛兵達が最上位者の大介に尋ねる。

「・・・・・・・・・・全員銃をしまえ」

「は？」

指示の意味がわからず、間拔けな声を出す衛兵。

「銃をしまえといったんだ」

「はっ」

いかにおかしい命令とはいえ、そこは上位者の命令が絶対の軍隊、不服そうにしながらも銃をしまう衛兵達。

それを見た男達も小銃を空に向ける。

「貴様らは何者だ！」

隊長らしい背の低い男が叫ぶ。

「大日本帝國陸軍第一調査小隊だ！皇軍と知ってのこの振舞い、ただでは済まさんぞ！！」

大介が怒鳴りかえす。

「帝國陸軍？　どういうことだ？」

背の低い男が不思議そうな声を出す。

「班長、こいつら軍事オタクかなんかじゃないんですか？」

意志の弱そうな男が背の低い男に言う。

「かもしれないな・・・おい！貴様らこの非常時に自衛隊に喧嘩を売ってただで済むと思っているのか！？」

背の低い男が聞いたことのない名前を出す。

「自衛隊？」

こんどは大介が不思議そうな声を出す番であった。

「貴様らこそ何を言っている？　そんな隊は我が軍には無いぞ」

「は？」

「まったく、時代が昭和になったからっていきなりこういう奴等が出てきたんじゃない・・・」

「お、おいおい、今は平成だろうが」

馬鹿にしたような声で背の低い男が言う。

「何を言っている。貴様ら新しい年号も知らんのか」

「お前らこそ何時まで戦前のつもりでいる気だ」

「戦前？何を言っている？」

相手の言っている意味が分からず不思議そうに問う大介。

「だから、何時まで昭和のつもりでいるんだよ」

「どうやら、相手は自分達が『平成』というところから来たと思い込んでいる様だ。」

「少佐殿、いかがいたしますか？」

衛兵が尋ねる。

「まあ待て」

答えながら謎の集団の方へ歩いていく。
当然ながら非武装である。

「止まれ！！」

全員が小銃を構える。

それを見た衛兵達も銃を構える。

両者の間に緊張が走るが、大介はそれにかまわず隊長らしい男のところへ歩いていく。

「なんだ？」

背が低いので見上げるように睨みながら男が言った。

「何時までもこうして睨みあっても仕方が無いでしょう？ここは私に免じて私の研究室で話ませんか？」

「・・・・・・・・・・いいでしょう」

暫く考えた後、背の低い男は了承した。

「それではこちらへ」

研究室の方へ歩き出す大介。

「坂田一士！松永一士！ついて来い！！残りは車両周辺を確保！」

背の低い男が指示を出しながらその後続く。

「衛兵の皆さんは撤収して、残りは俺についてきてくれ」

「しかし・・・・・・・・」

ようやく駆けつけた衛兵隊長が納得いかなそうに言う。

「命令だ」

「はっ」

上位者の命令とあっては仕方がなく、衛兵達は持ち場へ戻っていた。

「改めて自己紹介といきましょう」

自分の机に座りながら大介が言う。

「私の名前は高橋大介。帝國陸軍少佐です」

「・・・自分は陸上自衛隊の山口三等陸曹です」

「三等陸曹？なんだそれは？」

「何って、三等陸曹は三等陸曹です」

無然とした表情で山口が答える。

「ちょっと待ってください班長」

松永と呼ばれた眼鏡で小柄な男が会話をさえぎった。

「どうした松永？」

「先に確認しておきたいのですが、ここはどこで、今は何年何月ですか？」

それを聞いた大介が失笑交じりに答える。

「どこって、銀座に決まっているだろ。そして、今日は昭和元年4月14日だ」

「15日です」

すかさず柴田が修正する。

「ああそうだったな」

「ちょ、ちょっと待って下さい。昭和元年ってどういうことっすか？」

坂田と呼ばれた軽薄そうな男が山口に言う。

「待ってくれ、何をいつているのか良く分からないのだが？」

事態を飲み込めない山口が混乱したように言う。

「こういうことじゃないんですか班長」

松永が説明を始める。

「ここへ来る直前、何があったか覚えていますか？」

坂田が答える。

「何って、ソ連の爆撃機が爆弾を落としてきたんじゃないか」

「そう、突然現れたソ連機が我々の頭上に爆弾を落としてきた。本来ならば我々は粉々になっているはずです。しかし、我々はここにいる」

少し下がった眼鏡を指で治す松永。

「何がいたいんだ？ 要点を言え要点を」

気が短い山口が苛立った様に言う。

「つまり、我々は爆弾が炸裂した影響でこの時代、昭和元年に飛ばされてしまったという事です」

一瞬、全員が押し黙った。

全員の頭の中に青いロボットが浮かぶ。

「タイムスリップってことか？」

坂田が声を絞り出すように言う。

「恐らくはね」

眼鏡を光らせて松永が言う。

「ま、まてまて、そうすると君達はその平成とかいう年号の時代から来たという事か？」

大介が会話を割り込んでくる。

「そんな馬鹿な事があるか、一体何を考えて・・・」

「それではお尋ねします。あなた方の技術力で表のトラックや、今我々が持っているような装備を作る事ができますか？あなた方だけではない、工業国アメリカやイギリス、フランスやドイツ、そうそうロシアなんかもいいですな」

しかし、いかに優れた工業国家であろうとも彼らの装備品を作る事ができないのは、技術者である大介には分かりきっていた。

だが、時間を超えてきたという彼らの話は、それを認めたくなくなるほどおかしかった。

少なくとも、簡単には信じられない。

そして、彼らが持っているものがそこまで凄まじい物なのかどうか、よくよく考えてみるとわからないという疑問も出てきた。

「・・・班長、少佐殿に我々の持っている物を見せた方がいいですよ」

何時までも口を開こうとしない大介に苛立った松永が言う。

「ま、まて松永、私だって納得したわけじゃあないんだぞ」

「班長、じゃあ聞きますけど、我々の世界にこんな街中のところがあると思いますか？」

窓の外を指差す松永。

そこには、平屋が延々と連なり所々に飛行船や気球が飛んでいる昭和元年の帝都が広がっていた。

言われるまでもなく、現代にこんなところは無い。

班長と坂田は数秒で納得した。

「よし・・・何を見せればいいと思う？」

「そうですね・・・」

服についている携帯無線機を取り出す松永。

「いまから下にいる人たちに指示を送って色々と道具を持ってきてもらいます。それで納得してください」

「何をもって来るんだ？　こう見えて私も技術者だ。よほどのものではない限りは驚かんぞ」

馬鹿にしたように大介が言うと、松永はにやりと笑って言った。

「見ていてください」

第二話『陸上自衛隊?』

「つたくよお、ここはどこだって言うんだよお」

トラックのダッシュボードに両足を乗せながら中村三等陸曹は言った。

下士官として本来ならば一般兵たちに規範を示すべき立場であるはずなのだが、彼はいわば『何かの間違いで』下士官になったような男で、それは全員が既に了解しており、誰も彼の態度についてどうこう言ったりはしない。

「まあまあ三曹殿、落ち着いてくださいよ」

荷台への覗き窓からのんびりとした声が聞こえてくる。

「長谷部技監殿はずいぶんと落ち着いていられるんですね」

「まあね、それより、さっきこの空気を採取して検査したんだけどさ…」

「ガスですか!?!」

慌てて足元から防毒マスクを取り出そうとする三曹。

「ははは、落ち着いてくださいよ、ガスだったらもう死んでますよ」
ケタケタと笑いながら長谷部が笑う。

「お、脅かさないで下さいよ」

涙目になりながら後ろを振り向く三曹。

しかし相手は技監である、強い口調で言う事は出来ない。

ちなみに、技監とは技官や技師の総監督の事で、長谷部の場合は技術研究本部の本部長である。

何故それほどの高官が部隊と行動を共にしていたかというところ、ソ連軍によって全てのリーダーが破壊された北海道へ臨時の移動式リーダーを配備するために技術を持つものが総動員されたからである。

「すみませんね、それで空気の件なんですがね、ここの空気、普通より汚染物質の濃度が凄く薄いんです」

「それだけなんですか？」

「それだけって、通常より窒素酸化物やなんかの濃度が半分に近いんですよ？」

「何でそんなに低いんですか？」

「さあ？ただ恐らく…」

「恐らく？」

「ここは元いた日本とは違う所だと…」

深刻な顔をして長谷部。

「ま、まさか…」

真っ青な顔をしながら中村が言う。

頭ではそんな事はないと思っっているのに、そうとしか説明できない事態が続いていてゲシュタルト崩壊を起こしそうな中村。対照的に長谷部は落ち着いている。いや、この状況を楽しんでいるようにも見える。

それは性格もあるだろうが、技術者としての好奇心、というよりは探究心もあると思われる。

技術者や研究者という人種は、時として生存本能よりも好奇心や探究心を優先させるからだ

<こちら松永、18号車応答願います>

不意に無線機から松永の声が流れ出して思わずひっくり返りそうになる中村。

「わっ！ま、松永！びびらせるんじゃないっ！」

<申し訳ありません。班長より命令です>

「なんだ？」

<89式、MINIMI、パンツァーファースト？をそれぞれ一つずつ、今いる訓練場に配置するようにとのことです>

「お、おいおい、戦争でもおっぱじめる気か？」

焦った声を出す中村。

89式のみならば自衛用として分かる。

しかし、MINIMIはれっきとした機関銃であり、パンツァー

ファースト？にいたっては最新型の対戦車砲である。

おいそれとそんな物を使うわけにはいかない。牽制のつもりが一步間違えれば二桁の死者が出る可能性もあるのだ。

く落ち着いてください。こちらの力を相手に見せ付けるだけです。それでは直ぐにそちらへ向かいます＞

「あ、ああ」

「どうしました？」

通信が切れると、直ぐに長谷部が話し掛けてきた。

「いや、なんか武器の用意をするようにって…」

「うーん、いいんじゃないんですか？上官の指示なんだし」

「そうなんですけどね」

「それじゃあ直ぐに始めましょうよ」

「はあ」

生き生きしている長谷部を不思議そうに見ながら気の抜けた返事をする中村。

直ちに中村の指示の元、対戦車ロケットとMINIMI機銃が演習場に設置された。

念には念を入れて、発射箇所には土嚢を並べていつでも戦闘が行えるようにもした。

「おーし、用意出来てるな」

班長達が現れたのは、準備が整ってから十分後だった。

「はっ、配置完了しました」

今までの態度とは違い、真面目な顔をしながら中村。

「ご苦労、間もなく標的が……」

標的が来ると言おうとした山口の背後の建物の影から、小振りな戦車が2両現れた。

「はっ班長！あれは！？」

狼狽した中村が射撃体勢を取りながら言う。

「落ち着け、あれが標的だ」

「えっ…なるほど、あれをロケットで破壊する訳ですか」

ようやく何をするのか悟った中村が銃を下ろしながら言う。

「定位置についた後、乗員の退避を待ってロケットで破壊する」

「しかし、戦車は二両あります。もう一ついるのでは？」

そう、用意したロケットは1門しかないのだ。2両とも破壊する

のにはもう1門必要なのだ。

だが、中村は相手が何であるのかを忘れていた。

今中村達の目の前に停車しているのは97式中戦車（チハ型）の試作機である。

これは昭和11年に製作が決定し、その後大戦末期までにおよそ2123両が製造された三菱重工のベストセラー車である。

製作当初としては高機動・高性能とそれなりに使えたのだが、その後の性能向上に力を注がなかったため、対米戦で相手となったM4シャーマンには手が出せなく、数両で戦いを挑んではその全てが返り討ちになるという情けない結果を生み出していた。

まあそれはとにかく、この時期の日本にある戦車としてはもっとも高性能な物である。

ちなみに、名前の後にある『チハ』というのは『中戦車』の『チ』と設計順の三番目に当たるため『イロハ』の『ハ』を組み合わせたものである。

「僕の記憶が確かならば、97式の正面装甲はMINIMIの集中砲火に耐えられない筈です」

松永が眼鏡を指で治しながら言う。

「本当かよ、間違ってたら俺達笑い者だぜ」

いつのまにかマイルドセブンを口にくわえていた坂田が言う。

暫くライターを探していたが、あきらめたらしくタバコを箱に戻した。

「バズーカならあんなちゃいもんどころか90式でもやれるだろうけど、MINIMIは機関銃だぜ？はじかれて終わりじゃないの

か？」

「ご安心を、万が一装甲を貫通できなかった場合、89式小銃についているグレネードで止めを刺します」

坂田の持っているグレネードつき89式小銃を指差しながら松永が答える。

「どちらにせよあちらさんの度肝を抜く事ができるでしょう」

「という事だ、直ぐに射撃体勢に入れ。あちらさんには俺と松永が行く」

既に歩き始めながら班長が言う。

「あ、じゃあそういうことでお願いします」

小銃を持ちながら松永がついていく。

「そろそろ始まります」

大介のところに来ると山口が言った。

「あんな物で本当にチハ型が破壊できると思っているんですか？」

土囊の間に置かれたパンツァーファースト？を見ながら大介が言う。

「それでは早速見ていただきますよう」

傍らに控えていた松永に指示を出す。

松永が中村に指示を伝えると、直ぐに自衛隊員たちが配置に付きだした。

中村が土囊のところに伏せ、パンツァーファースト？を構える。後ろに回った坂田がロケット弾を装填し、中村のヘルメットを叩く。

昔から続く装填完了の合図である。

<撃ちます！>

無線から緊迫した感じの声がするのと同時にパンツァーファースト？が発射された。

放たれたロケット弾は内蔵された固形燃料に点火して、オレンジ色の炎と煙を噴出しながら一気に加速してチハへと襲い掛かる。

総合火力演習や日ごろの演習でよく目になっていた山口達にとっては見慣れた光景だが、ロケット自体を始めてみた大介達は記録用の写真をとるのも忘れて啞然としている。

そして、発射から三秒後にロケットはチハに着弾した。

モンロー効果で装甲を溶かし、一瞬で内部に侵入したロケット弾は内部で反対側の装甲にぶつかって炸裂した。

凄まじい轟音を発してチハの砲塔が宙に舞い、少し後ろに着地する。

「次、MINIMI射撃開始」

<了解>

トラックの真横に土囊を積み上げて設けられた発射場所からMI

N I M I が発射される。

M I N I M I とは 5・56mm 機関銃 M I N I M I の略称で、89 式小銃と同じ 5・56mm 弾を発射する事ができる普通科部隊の基本武装の一つである。

専用の箱型弾倉のほかに、ベルト式（ランボーが肩にかけてるあれ）、89 式小銃の弾倉による給弾が可能となっている。

土嚢や障害物、地面に三脚を置いて発射する他に、他の隊員が両手で三脚を持って発射したり、腰だめに発射する事もできる。

日本人の体型にジャストフィットした重量と形状は自衛隊の装備品の中でも特筆すべき使い勝手の良さだが、値段の方は適正かというところでもないらしい。

映画でおなじみの『ダ』の連発を響かせながら 5・56mm 弾が毎分約 800 発の勢いで発射されていく。

たちまちチハ型の装甲にへこみが付く。

幾ら 50 年以上未来の物とはいえ、こちらは機関銃で相手は戦車である。

おいそれと装甲を破れる物ではない。

カンカンとむなしい音を立てて跳ね返される弾丸。

撃っている隊員が（やっぱ無理だよ）と思った瞬間、立て続けに弾丸を打ち込まれた正面装甲の一部がついに屈した。

ビシッという音と共に戦車の内部で銃弾が跳ね回る音がする。

「ええっ!!」

その様子を別の場所から見ていた大介達が再び驚愕して声を出す。一度装甲が開いてしまえば破壊するのは簡単である。

続けざまに銃弾を撃ちこんでいく。放たれた弾丸は次々と脆くなった装甲を破って戦車の中を跳ね回る。

と、不意に跳弾の一つが坂田の胸に突き刺さった。

「いっ痛てえ!!」

叫んでひっくり返る坂田。

「じゃ、射撃中止!!」

慌てた山口が叫びながら坂田の方へ走っていく。

「衛生兵! 怪我人だ!!」

一瞬呆けていた大介であったが、慌てて衛生兵を呼びつつ坂田の元へと走り出した。

大介が坂田の所へ到着したところには、その場に居合わせた自衛隊員全員が坂田の周りを囲むようにして様子を見ていた。

「坂田! おい坂田!!」

山口が坂田の肩をゆすっている。

「は…班長?」

坂田がうつすらと目を開く。

「は、ははは…ごほっごほっ…やられちゃいましたよ…」

胸ポケットからタバコを取り出す。

「最後は…こいつをくわえながらカッコよく決めさせてもらいます

…」

言いつつタバコの箱から一本取り出して唇でくわえる。

「ち、畜生…目が霞んできやがった…」

そのとき、坂田のタバコの箱を見た山口があることに気がついた。

「あ…浅野三曹だ…おゝい」

既に幻覚が見えるのだろうか、坂田は憧れの上官の名前を呼んだ。

「え？こっちへ来ていいことしようって？いいよ」

それを聞いた山口の顔が引きつる。

「な、貴様！そんな事は許さんぞ！起きろ…！！」

どこからか出した警棒で坂田の側頭部を思いっきり叩く。

ガッン…！！

凄まじい音があたりに鳴り響き、坂田が飛び起きる。

「いてえ…！！班長、あんた殺す気ですか！」

「うるせえ！夢の中だって浅野三曹に触るんじゃねえ…！！」

取っ組み合いを始めた二人をあきれた目で見ながら大介が松永に尋ねる。

「彼は結局どうしたんだ？」

同じくあきれた目で見ていた松永が答える。

「あたりましたよ。それも心臓の所に」

まるで何事もなかったかのように答える松永。

「あたりましたよって、何であいつは死んでいないんだ？」

「ああ、これですよ」

言うところ松永は自分の迷彩服の下から防弾服を見せた。

「それは？」

「防弾服と言いましてね、特殊な繊維の服に装甲板を入れたものです」

「……」

「見せ付けられた兵器だけでも信じられないと言うのに、今見せられた服はその上を行っていた。」

しかし、信じないわけにはいかない。

現実にはチハ型二両は撃破され、銃弾を受けた男はあおして元気に殴り合いをしているのだ。

「……大佐に会ってくる」

傍らにいた柴田に言う和大介は建物に向かって歩き出した。

「少佐、あの二人はどうするんですか？」

後ろから柴田の声が聞こえてくる。

「ほっとけ」

大介の答えは簡潔だった。

第三話『目標は核兵器廃絶』

最新兵器を見せ付けられ、大介はあっさりと山口たちの言う事を信じた。

そして、彼は山口たちの持つ兵器や技術をどうすればいいのか、誰に聞くまでもなく結論を出し、そのための行動を始める。

かくして、未来人たちは陸軍大佐佐藤大輔との会談に出席する事となる。

「で？ 貴様らは何が望みなんだ？」

椅子に反り返っている佐藤大佐が言う。

中学生程度の身長の上に上官に対して卑屈な態度をとりやすい山口は一瞬で負けた。

「え、えーと、望みと言いますか、こちらからの提案なのですが…」

早くも緊張してしどろもどろになる山口。

「提案？」

実は密かに窓から実験の様子を見ていた大佐の目が光る。

「はい、我々の持つ技術や知識を全て皇国に謙譲します」

「その見返りに保護を、か？」

「はい。聞けばここはかなり排他的かつ閉鎖的な基地と聞きます」

「まあな」

答えつつ、心の中で（正確には嫌われ者の集団を閉じ込めた刑務所に近いがな）と呟く大佐。

「ですから、私以下五名を保護していただきたいのです」

「ほう……少し待て」

「なんですか？」

山口達を隣室で待たせた後、大佐は大介のみに部屋に残るように命じた。

「どうしたらいいと思う？」

山口達が待たされている隣室を見ながら大佐が言う。

「彼らの提案を受けるべきではないかと」

「何故だ？」

面白そうに大佐が尋ねる。

「彼らのもっている武器は我々のそれを大きく上回る性能をもっています。」

あれらに使われている技術を我が国でも使えるようにできれば、帝國は世界一の技術力を手にする事ができるだけではなく、それを用いて世界一の軍事力を持つこともできます」

「ほう、世界一とな？」

大佐の目が細められる。

「はい、世界一です」

自信を持って言い切る大介。

試作とはいえ次期戦車であるチハ型の装甲を紙のように突き破ったあのロケットという兵器さえ量産できれば、敵がどんな戦車を投入しようと撃破できるであろう事は誰でもわかる。

それからMINIMIとかいう機関銃、あれほどの完成度を誇る兵器を製造するための技術、そして高性能で貫通性に優れた弾丸。

そして、彼らが言うリーダー——100%の信用性と水平線すら越えてしまう電索——を開発できれば、皇国の必勝は疑うまでもなくなる。

彼の頭の中はそれでいっぱいだった。

実際にはトラックに積まれているエンジンや89式小銃など参考にする点はいくつもあるのだが、そこまではさすがの大介も頭が回らない。

「それで？彼らの処遇はどうしたい？」

「そうですね：我が部隊専属の科学顧問でいかがでしょう？」

数秒だけ考えた大介が言う。

「科学顧問ね：それでいいだろう、取り計らっておく」

「はっ、ありがとうございます」

踵を揃え、敬礼をしながら大介が言う。

「礼はいい、それより壊れた電索をさっさと作り直せ」

「はあ、何故ですか？」

もっと高性能な物が作れるかもしれないのに、わざわざ低性能な物を作らせようとする大佐の指示の意味がわからない大介。

「ですから、彼らの技術を使えば…」

「それができるまでに何日掛かる？ 貴様らに残された時間はあとわずかだぞ」

「あっ、そうだ！ も、もうしわけありません。直ちに試作機を再建造します」

ようやく指示の意味がわかり慌てる大介。

「そうしろ、時間がないぞ」

「はっ！」

その2日後、深夜の九十九里沿岸を舞台に電索の性能試験が行わ

れた。

試験の内容は、別々の方向からやってくる仮想敵機が、海岸に照明施設と一緒に設置された電索付近に通信筒を投下するまでに全て発見できるかと言う物である。

軍の落ちこぼれ達を集めた銀座研究所、一部の口の悪い将校たちの間では別名銀座刑務所と呼ばれている集団が作った装置と言う事で、どうせまともに動きはしないだろうと思っていた上層部の予想は大きく裏切られた。

なんと、試験開始とほぼ同時に別方向からこちらへ向けて飛行中だった複葉機5機すべてを発見してしまったのだ。

翌日、日が昇る前から佐藤大佐の卓上電話は鳴り止まなかったと言うから、いかに上層部が電索の性能に驚かされたかが伺える。

ひとまず研究員と言う形で銀座研究所に保護された山口達は、班長の山口三等陸曹、軍事マニアの松永一等陸士、技監の長谷部の三人が連日会議を開いていた。

「まず最初に考えるべき事は、我々は何ができるかと言う事です」

黒板に議題を次々と書き入れながら長谷部が言う。

「具体的には、史実を元にした作戦立案の補助、我々の持つ技術の供与などが考えられます。

前者の方ですが、別に軍事行動だけではなく、満州事変に関する件など歴史的事項にも言えることです。

例えば、朝鮮半島への無駄な干渉や中国への無意味な出兵など、国力の無駄遣いどころか自分の首をしめるに等しい行動の停止、そして世界恐慌によって起こる経済ブロック化に対抗しうるアジア経

済共同体の建設などなど：先を知るからこそできる、いわばじゃんけんの後出し的戦略の立案とその補助などです」

「ちょ、ちょっと待って下さい」

山口が両手を前に出して長谷部の説明をさえぎる。

「満州事変ってなんでしたっけ？」

その言葉に長谷部と松永の首がすんと下を向く。

「山口さん、あんた基幹隊員でしょ？だめですよそれくらい知らないきゃ」

「そうですよ班長。自衛隊員として、今までに起きた戦争の詳細を知っておくのは当然の事ですよ！」

松永が立ち上がって言う。

（それは違う）

山口と長谷部の気持ちは一つになった。

「：えーと、ごほん！満州事変というのは、柳条湖事件と呼ばれる満州鉄道爆破事件を契機に始まった日本軍による中国への武力侵攻の事を言います。

これが原因で日中戦争がはじまったといっても過言ではありません
ん」

「そ、そうなのか」

「はい、その後指揮官の独断による越境出撃、関東軍による空爆と暴走が始まります」

黒板の前に立ち、私物と思われる本を小脇に抱えた長谷部はまるで歴史の教師のようだ。

「結果として、我が国は隣国中国と戦争を始めますが、そもそもあんなでかい国を屈服させようとするのが間違っているんです。

仮に屈服させたとしてですよ、あんな巨大な国を管理できるわけがないんです。

現に朝鮮や樺太を抱えているだけでも我が国の管理能力は限界を超える一歩手前なのですから」

「それではどうすれば？」

先ほどから瞳を輝かせていた松永が長谷部に尋ねる。

「中国を武力で屈服させるのは不可能です。これは歴史が証明してくれています。

ではどうするか？答えは単純です。彼らと敵対するのではなく、彼らを中心としたアジア諸国と手を組んで一つの勢力を作るのです」

「ASEANみたいなのか？」

山口が持っている知識を総動員して該当しそうな名前を出す。すると、長谷部は出来のいい生徒を褒めるような口調で再び喋りだした。

「よくできました。」

私が考えている経済統合機構は、私たちの世界において存在した ASEAN——東南アジア諸国連合、1967年設立——に近い物がありますね。

まあ、どちらかと言うとAPECに近い物がありますけど」

「それは確か中東の奴じゃないのか？」

「それはOPEC——石油輸出国機構、1960年結成——です。確かに名前は似ていないわけではありませんが、あれは石油産出国がメジャーの石油支配に抵抗するために結成した物で、私が言っているのはAPEC——アジア太平洋経済協力会議、1989年設立——です」

どうやら、長谷部は世界史や現代社会などにも造詣が深いらしい。

「メジャー？有名所ってことか？」

しかし山口は現代社会の成績が悪かった。

「そりゃあ確かに英語のメジャーの意味は有名ですけどね、私が言っているのは国際石油資本の（メジャー）のことです！それくらいは文脈を読めば分かるでしょう！？」

余りにボケた答えに長谷部の怒りが少し爆発した。

「こくさいせきゆしほん？」

山口の脳で処理できる限界を超えているらしく、すでに言葉がひらがな化している。

その様子を見た長谷部がこめかみを抑えながら説明を開始する。
既に怒りを感じる領域を越えたらしい。

「ふう……いいですか？ 国際石油資本というのは石油の採掘から輸送：製造：販売などを一括して扱って世界の石油産業を支配する国際的な石油資本の事で、アメリカ系のモービル，エクソン，テキサコ，シェブロン，イギリスのブリティッシュ：ペトロリアム，イギリス：オランダ合併のロイヤル：ダッチ：シェルにフランス石油を加えた7社のことを言います」

「モービルは知ってるぞ」

国内のガソリンスタンドでよく見る名前はわかった山口。

「まあ、そう言ったことに疎い班長さんですら知っているという事でいかにメジャーが巨大かはわかりましたよね？」

少しだけ不安そうに長谷部が山口に尋ねる。

「……わかった」

「（今の間はなんだよ）とまあ班長殿が納得した所で話を元に戻しますが、えーと、とにかく、私が作りたいと思っているのはAPECです」

「それはどういうものなんだ？」

まったく分かりません、という表情で山口が言う。

「APECと言うのは、我が国を初めとした21カ国の国、地域に

よって作られている世界経済のブロック化——例えばEUの市場統合など——に対処する機構のことです。『開かれた地域協力』を掲げ、自由貿易の拡大、投資促進などを進めて、アジア：太平洋圏の経済協力強化を行っています。

私はアジア諸国と非白人国による、それも我が国を主軸とするAPECを考えています。

しかし、勘違いして欲しくないのですが、これはあくまでも経済共同体であって、主従関係などはないんです」

「どういうことだ？」

長谷部の言わんとしている事がいまいち分からない山口。

「つまり、経済力の違いはあれど、我が国とアジア諸国はあくまでもよき友人でいこうという事です」

かなり演説に熱が入ったらしく、身振り手振りまで混ぜて説明している。

「これによってアジア諸国が結ばれば、欧米列強に対抗できる一大勢力になるどころか、多彩な人材：豊かな資源、そして世界一の軍事力と強い団結力を持つ史上最強の共同体を形成する事が出来るかもしれません」

そこまで言うのと落ち着いたのか、長谷部はいったん椅子に座った。

「長谷部さんの言いたいところは分かりました。ですがどうやってそれを実行するんですか？」

いち早く話を飲み込んだ松永が具体的なプランを尋ねる。

「それをこれから話し合います、といたいところなのですが、まあ大まかなプランは出来ているんですよ。皆さん、お手元の資料をご覧ください」

ここに来て、最初に配られていた資料によりやく出番が来た。
この時点で、会議開始から既に一時間が経過していた。

「まず最初に行うべきなのは、陸海軍内部の意識改革と、空軍の創設、そして技術革新です」

資料の一ページ目には兵器と言うタイトルと、必須項目としてリーダー、パッシブ：アクティブソナー、750以上出るエンジン、トランジスタなどと書かれていた。

「これは？」

山口が尋ねる。

「今後、2・3年以内に実用化しなければならない物をリストアップしました。

リーダー・ソナーに関しては今更重要性を説く必要は無いでしょう。

750以上出るエンジンとは、時速750km以上を出す事が出来る馬力を持つ航空エンジンということです。

これにより、悪名高い『ワンショットライター』をはじめとした日本軍機特有の装甲の薄さと、出力の低いエンジンのせいで目の目を見なかった超重爆撃機の製造を行い、航空戦力の強化を行うのです」

「なるほど、それではトランジスタってのは？」

当然のように尋ねた山口を、哀れむような目で見ると長谷部と松永。

「トランジスタは分かりますよね？」

恐る恐る長谷部が尋ねる。

「ああ」

なぜか自信満々に山口。

「それならば話は早い。トランジスタを作る事によって、真空管を使用したときよりもっと信用性が高く、もっと小型に各種装置を作る事が出来るんですよ。

それに、トランジスタを使った装置をいくつも使えばICかそれに限りなく近い物を作ることだって出来ます」

「な、なるほど」

「戦争において技術力の違いはそのまま戦力差に繋がります。工業力だけでもアメリカの十分の一の我が国がこの先勝ち抜いていくのには、技術力と周辺諸国との協調はなによりも大切です」

「だが、トランジスタなんてそんな気楽に作れるものか？」

山口がふと気がついたように言う。

確かに設計図も持たずに一からそんなものを作れるとは思わない。

「ああ、その点は問題ありません。私は技監になるほどの男ですし、

もう一人、一緒に来た私の部下が何とかしますよ」

長谷部はそこでニタリと笑った

「ふえっくし！」

トラックで待機していた長谷部の部下、柴村鏡花がくしゃみをする。

今年で21になる、容姿端麗頭脳明晰語学堪能文武両道といくつもの四文字熟語が当てはまる素晴らしい女性である。

身長は165cm、体重43?、スリーサイズは上から85・36・60、趣味は読書（専門文献に限る）と紅茶を入れる事。

それとダイエット代わりに銃剣道や徒手格闘を行う事。

そして独身で恋人はなし。

ちなみに描写が異常に詳しいのは作者の趣味なので気にしないでもらいたい。

「風邪ですか？」

荷台で装備品のチェックをしていた坂田が話し掛ける。

「いえ、多分誰かがうわさでもしてたんでしょ」

再び読んでいた専門書に目を落としながら鏡花。

その姿は73式特大トラックの荷台であるということを考慮しても（いやむしろそれが追加されて）非常に絵になるが、読んでいる本の内容が『リスクマネジメント概論——日本帝国の犯した失敗とその傾向——』というのがいただけでない。

「気をつけてくださいよ、ここじゃあ薬局に行って風邪薬を買ってくるわけにはいかんですから」

装備品のチェックを続けながら坂田が言う。

「わかってるわよ」

素っ気無い鏡花。

ちなみに、極度の女好きである坂田が彼女に手を出さない理由は一つ。

この部隊に彼女が着任した際に手を出そうとし、近くにあった小銃で完膚なきまでに叩き伏せられたからである。

「あのお嬢さん、役に立つんですか？」

「立ちますとも、彼女は私の一番弟子ですから」

胸をはって長谷部が言う。

「まあ、そういうわけで補助兵装や技術関連に関しては私と鏡花に任せてください。次に、兵器や戦術に関してなのですが…」

「そこから先は私が説明します！！」

普段は大人しい松永が立ち上がって叫ぶ。

銃器マニアでミリタリーオタクの彼は、銃を持つと性格が変わる。

「まず、先ほどもご覧になったチハ型戦車を初めとした脆弱な機甲戦力の改善！歩兵用装備の向上と強化！

レーダー測定器などを使つての艦船の砲の命中率の向上！航空戦力の強化！歴史に基づいた先手を打つ作戦の立案補助！諜報機関の強化！そして・・・ロスアラモス研究所の爆破です」

最後の項目に室内は静まり返る。

「原爆か」

山口が呟く。

「そうです」

松永が静かに答える。

「しかし、アメリカの開発を妨害するだけではありません。やつらより先に我々が開発し、そしてあの国へ落としてやるんです」

「「な、なんだってー！？」」

とんでもない発言に二人が思わず叫ぶ。

「長谷部技監ほどのお人ならば初步的なものならば作れるでしょう？」

「そりゃ作れるが・・・じゃなくて！そんな事をしてどうする！？」

唾を飛ばして叫ぶ長谷部とは対照的に、松永は落ち着き払っている。

「我々の世界でのお返しと、今後の核開発の妨害です」

「お返しは分かるが、どうやって妨害する？」

「簡単な事です。実際に落として、その結果と恐ろしさをローマ法王に見せてやり、彼の名で全面撤廃を世界に勧告させるのです」

それは、白人社会においてこれ以上無い抑止力であった。

キリスト教を第一とする白人社会において、ローマ法王の勧告を無視する愚か者はそうそういない。

そして、非キリスト圏においてもそれは言える。

ローマ法王の勧告を無視すると言う事は、そのままキリスト圏国家との深刻な対立を意味する。

下手をすればそれを口実に侵略戦争がおきる可能性もありえる。宗教の力という物は、時として核兵器にも勝る事がある。

「なるほど！そうすれば、どの国も持つことは無くなる！」

長谷部がぼんと手を打つ。

「そうです。そして我が国は核兵器撤廃を実現させた国として、後世にいたるまで歴史に名を残すでしょう」

今度は松永が演説病に掛かったらしい。

ヒートアップしていく会議室。

会議は翌朝まで続けられた…

第四話『5121小隊登場』

翌朝、目を真っ赤にした三人は徹夜明けの重い体を引きずって佐藤大佐の部屋を訪れた。

朝っぱらから酔っ払いのようにふらふらしている男三人の訪問を受けて彼はかなり怒っていた。

「で？会議の結果はどうなったのだ？夜警がうるさいと怒っていたぞ」

葉巻を吹かしながら大佐が発言を促す。

その言葉に山口が一步前に出て答える。

「一晩中議論を続けた結果、今後の方針が固まりましたのでご報告します。

まず、銀座研究所を拠点として日本の技術力の底上げを行います。技術力の差は戦力の差にそのまま影響しますので」

「そうなのか？」

大佐が興味を覚えたように尋ねる。

「はい。第一次世界大戦がそのいい例かと思えます。大佐殿も戦車の恐ろしさは良くご存知かと」

「まあな」

銃弾を跳ね返ししながら塹壕を踏み潰し突き進む戦車隊を思い出して思わず背筋が寒くなる大佐。

考えてみれば、目の前にいる男達は戦車すらも軽々と倒してしまう装備をもっているのだ。なるほど、確かに技術力は戦力の差に少なからずとも影響するようだ。

「歩兵装備の強化、敵の通信を攪乱する装置、敵を自動で追尾する爆弾、音より速く飛ぶ航空機などなど、我々に協力さえしていただければ全て用意できます」

既に頭の中では具体的な開発プランが出来上がっている長谷部が言う。

「貴様らでなければとくに追い出しているのだがな、まあ貴様らがチハ型を一瞬で破壊する様を見た以上はそうするわけにもいかん。よし、研究開発に関しては可能な限り協力してやろう」

「ありがとうございます」

長谷部が頭を下げる。

「ただし」

大佐は続ける。

「ただし？」

「それなりに期限をきめてやってもらう。いつまでたっても開発中じゃあ話にならない」

「分かっておりますとも。ですが、多少は長めに取って頂かないと。2日や3日でおいそれと出来る物ではありませんからね」

「そんな事は分かっている」

「ありがとうございます」

「ひとまずは何を作るんだ？」

「トランジスタという電子部品です。」

これを使う事によって、いままで真空管に依存していた装置の性能を飛躍的に増大させ、かつ軽量化と小型化を行う事が出来ます。もちろん、信用性も増加します」

「とら：まあいい。で？どれくらい掛かるんだ？」

「そうですね、大体2週間も頂ければトランジスタを搭載した試作のリーダーをお披露目できます」

「2週間だな？よし、予算に関しては可能な限り協力するように私から言っておく」

そこで今度は松永が前に出る。

「それでは続きまして自分から史実に基づいた作戦立案について説明させていただきます」

「おう」

「それでは、最初にこの先起きる第二次世界大戦の概略を説明させ

ていただきます」

そこで松永は第二次世界大戦で起きたことを可能な限り事細かに説明した。

事の発端となった張作霖爆殺事件から、満州国建国。そして盧溝橋事件から始まった日中戦争。その規模は定かでは無いにしても起きた日本軍による南京大虐殺。日独伊防衛協定。

昭和13年の国家総動員法から始まった全国規模の生活統制。翌年昭和14年に起きたノモンハン事件による陸軍の信じられない規模の惨敗。

昭和15年の北部仏領印度進駐と日独伊三国軍事同盟成立。大政翼賛会発足。

翌年昭和16年。日ソ中立条約。関東軍特種演習と同時に行われた南部仏領印度進駐。

そして、1941年12月8日、運命の太平洋戦争開戦。

タイのシンゴラ奇襲上陸と真珠湾奇襲攻撃。

マレー半島、香港、シンガポール、ビルマ、オランダ領東印度諸島、フィリピン諸島と続いた快進撃。

1942年6月のミッドウェー海戦の敗北からソロモン諸島ガダルカナル撤退、そして始まった各地の日本軍玉砕。

1944年7月のサイパン島陥落。

9月のイタリア降伏。11月以降から始まった本土空襲。

1945年3月下旬から沖縄で始まった『鉄の暴風』。

5月のドイツ第三帝国無条件降伏。

7月に米・英・中三国によるポツダム宣言。

鈴木貫太郎内閣によるポツダム宣言黙殺。

8月6日に起きた広島への原爆投下。

8日、同年2月のヤルタ会議によるソ連の中立条約の一方的破棄。
9日、ソ連軍による満州への侵略。

同日に起きた長崎への原爆投下。

14日、日本無条件降伏。

そして1945年8月15日、昭和天皇による『玉音放送』……

帝國陸海軍の事実上の『全滅』

焼き払われた都市、そのあちこちにゴミの様に積み上げられた無数の帝國臣民の遺体。

GHQによる占領政策。

誇りと自信を失った日本国。

そして、政治的植民地として周辺諸国とアメリカ合衆国の顔色を窺いつつ歩まれる今日までの歴史……

「ふう」

全てを聞き終えた大佐は深いため息をついた。

この先大日本帝国を待ち受ける余りにも悲惨な運命を知ってしまった彼は、ため息をつく以外何も出来なかった。

「それで、貴様はどうするんだ？」

疲れたように松永に話し掛ける大佐。

「このことを踏まえたうえで、皇国をより良い方向へ導くための作戦立案の補助です」

「つまり参謀の事か？」

「それに近いですね。

私たちの時代では、過去の大戦について個人で研究している物がかなりあります。

そのため、大戦当時の軍の動きや艦隊戦の結果など神でもない限り知り得ない情報を多数記憶しております。

この知識を元にすれば、作戦行動時にどのような行動を取れば敵を殲滅し、こちらの被害を減らす事が出来るかを知る事が出来ます」

「なるほど」

「聞けば閣下は各地へ顔が利くとか、閣下のお名前で陸海軍へ助言などしていただけると助かるのですが」

「よかろう、許可する」

「ありがとうございます」

自分が直接歴史に関与できる事に喜びを感じながら松永が頭を下げる。

「最後は自分です」

山口が前に出る。

「貴様はなんだ？」

「ここを拠点として、帝國空軍を作っていたのだきたいのです」

「空軍？」

「はい。陸海軍の各航空隊を全て結集し、ここ銀座研究所の横あたりにでも空軍省を置いていただきたいのです」

「まてまて、空軍っていうと飛行機を使うんだよね？」

「はい」

「あんな物役に立つか？駆逐艦一隻倒すのにも一苦労じゃないか」

この時代、航空機に対する軍関係者の評価は軒並み低かった。それは未だ技術が確立されていないことを理由とする低い耐久度と攻撃力が主な原因であった。

「さきほど閣下は駆逐艦を沈めるのにも苦戦するといっておりましたね。それでは潜水艦は敵艦を沈めるときどうしますか？」

「魚雷を使うに決まっているではないか」

あたりまえだろと言う顔をしながら大佐が言う。
それを聞くと山口は尋ねた。

「それでは閣下。10機の航空機と1隻の潜水艦。どちらが高価ですか？」

「馬鹿か？潜水艦に決まってるじゃないか」

頭がおかしいのか？といわんばかりの顔で大佐が答える。

「それでは、周囲を警戒しつつ潜望鏡で狙いをつけた4本の魚雷と、敵艦隊を常に視界に治めつつ発射される10発の魚雷…どちらが効

果的ですか？」

「・・・10発の魚雷だな」

徐々に山口の言わんとするところが分かってくる大佐。

「それでは、魚雷を装填した航空機数十機と水雷戦隊。どちらが対費用効果に優れていますか？」

「ついひようこうか？」

聞きなれる単語に目を丸くする大佐。

「つまりですね、生産や運用にかかる費用を考えた場合に、それがどの程度の性能を発揮できるかという事です。

対費用効果に優れていると言う事は、値段のわりにいい働きをするとも言いますか、まあ、いわゆる『お得』というやつですね。安価でありながら高性能なものでも思ってください」

大佐は少し考えた顔をする。

「当たるんならば航空機の方だが、そんなに高性能な物があるとは聞いていない。まあ、そのうち・・・」

「ですから作るんです。

幸いな事に、我々には優秀な技術者が二名おりますから、どちらか片方に新型動力機の開発に回って頂いて、運動性・装甲・武装全てに優れた航空機を製作します。

それを見ていただければきっと閣下も納得していただける筈です」

「まあ、言うだけであれば誰にでも出来る。せいぜい頑張りたまえ」

「はっ、それでは完成の暁には…」

「いいだろう、可能な限り働きかけてやる」

「ありがとうございます」

「さて、私は眠いからもう一寝入りする事にする。さっさと消えろ」

眠そうな目をこすりながら大佐が言う。

久々に早起き――それでも定刻に遅刻していたが――したために、彼は凄まじく眠かった。

分かりましたと三人が敬礼して部屋を出ると、早速机に突っ伏していびきをかき始めた。

しかし、彼の安眠はわずか数分で破られた。

異変に最初に気づいたのは坂田だった。

トラックの運転席で惰眠をむさぼっていた彼は、いつからか無線機に空電が入っているのに気がついた。

どうやら、寝返りをうっている間にスイッチに触れてしまったらしい。

スイッチを切ろうと彼が手を伸ばした途端…

<…ちら…小隊…だれ…応……してく……>

手を伸ばしたまま彼は固まった。

無線機に通信が入っている!?

震える手でレシーバーを掴む。

「こちら中村三等陸曹！！応答願います！！」

<陸……？…何を……まあい……>

徐々に空電が収まってくる。

<こちら5121小隊、瀬戸口です！後方に撤退許可を願います！>

通信がはつきりとするのと同時に、銀座研究所の一角である射撃試験場に、突然戦闘ヘリ2機、見慣れない戦車1両、坂田達のは違う大型のトラック1台、ドラム缶やコンテナ多数。そして、人型の巨大なロボットが3機現れた。

一瞬、銀座研究所の面々と現れた連中はお互いに呆けたような顔をした。

しかし、次の瞬間にはお互い武器を構えてにらみ合いを始めた。相手には見たことも無い機動兵器や戦車、着陸しているとはいえ戦闘ヘリすらあるのだ。

トラック1台の山口達の時とは危険度の度合いが違う。

「善行委員長、どうしますか？」

薄暗い車内で、モニターの中に映し出されている1945年代の日本兵の格好をした集団を見ながら、オペレーターの瀬戸口が部長である善行に尋ねる。

容姿が結構優れているうえに何よりも色恋沙汰を優先する彼は『

人妻から幼稚園児』までをカバーする幅広い趣味の持ち主である。

「監視を続けろ」

某組織の司令官のようにコンソールに両肘を下ろし、両手を顔の前で組みながら善行が答える。

冷静沈着で、常に的確かつ迅速な指示を下す切れ者である彼は、なぜかいつも半ズボンだった。

くしっかしどうなってるんだろうな？>

通信機から2号機パイロットの滝川陽平の能天気な声が聞こえてくる。

幼いところからいわゆる『ヒーロー』にあこがれている彼は、なぜか思考が他の部隊員に比べて幼い。

くいったいどうなっているのだ？速水、何かわからんのか？>

きびきびした感じの若い女の声が無線から流れる。

声の主は芝村舞。

裏社会に精通し、世界経済を牛耳る芝村一族の一員であり、豊富な知識と壮絶なまでの行動力を持っている上にさまざまな技能をもっているだけではなく、かなりの美貌までももっている万能の天才である。

複座型である彼女の搭乗機3号機に同乗している速水厚志のことを想っているのは公然の秘密である。

ちなみに、某宇宙物アニメのヒロインと喋り方が似ているのは気のせいでは無いと思う。

く少なくとも、さっきまでいた前線じゃないことは確かだよね。あ

「あ、この様子だと明日のプールには行けそうも無いね」

ぼやんとした口調であるが、なぜかどこかに冷たい感じがする声で答えているのは噂の速水厚志である。

生存確率が比較的高いという安易な理由でこの部隊に入った彼は、心優しく、気が弱く、いつも幸せそうな顔をしている。

本人は意識していないが割と美形で、なぜか個性の強い、性格が歪んだ輩に好かれるという特性を持つ。

実戦に出始めて直ぐに持ち前の才能が開花し、初陣から僅か一ヶ月で撃墜数は三桁に届いていた。

あまたの勲章を授与し、週に数度はテレビに出ている彼の事を、部隊の同僚達は初めこそ怯えていたが、彼のお陰で生き残れているとプラス思考で考えだしてからは感謝するようになっていた。

「くばばば馬鹿者！そういうことを人前でいうでない！！」

舞の慌てふためく声が部隊全員に流れる。

「く不潔です！」

そこにすかさず突っ込みを入れるのは壬生屋未央、1号機パイロットである。

旧家の娘で古武術をたしなむ典型的な大和撫子の彼女は、極度の潔癖症のうえに世間知らずで、そのレベルは男女が話すだけでも『不潔です』といいだすほどである。

旧家の人間である事との関係があるのかどうかは知らないが、常に袴をはいている。

芝村一族を嫌悪しており、当然ながら舞のことも嫌っている。

「く未央ちゃん、舞ちゃんと喧嘩しちゃめーなの」

そこへ子供の声で仲裁が入る。

声の主は東原ののみ。オペレーターである。

部隊で1番幼く見える彼女は見た目的には小学生くらいなのだが、それは非道な人体実験の結果で成長できない体だからであり、実際にはもっと年齢は高い。

瀬戸口が彼女の事を好きなのは秘密。

「どうするんですか？」

瀬戸口が、今度は善行の方を見て尋ねる。

明らかに異常なこの事態に、善行の事を嫌う彼とは言え頼らずにはいられなかった。

「……ひとまず相手の部隊長と話してみます」

建物から太った軍服姿の男が出てくるのをモニター越しに見ながら善行が答える。

歴史の歯車が、確実に狂いだしていた…。

第五話『敵か味方か人型機動兵器』

「お前らの知り合い・・・じゃなさそうだな」

建物を出て直ぐのところにいた山口に佐藤大佐が言った。

山口達が小銃やパンツァーファースト?を構えて戦闘態勢に入っていたからである。

「お前らの敵か？」

自分も設けられた土嚢に身を隠して大佐が尋ねる。

「いえ、自分達の世界にはあんな形の戦車はありませんし、第一あんな人型の機動兵器なんて存在しておりません」

戦車砲ほどもある砲を構えてこちらを向いている人型を見ながら松永が答える。

「班長!どうするんですか!?発砲するんですか!?!」

完全に錯乱した坂田が言う。

元チンピラの彼にとって、相手に戦車がいるという状況は理性を失わせるのに十分だったらしい。

もっとも、山口達も錯乱一步手前であつたが……

「落ち着け坂田。まずは相手の動きを見ないと……」

上官としての威厳を保つため、ありったけの理性を総動員しつつ山口が静めようとする。

「相手の動きを見るってたって戦車がいるんだぜ!!それに戦闘へりも!先にやらなきゃやられるんだよ!!」

山口の制止を振り切って中村が発砲しようとする。

89式を構え、伏せていた場所から立ち上がる。

「あっ、この馬鹿っ!」

慌てて山口が立ち上がり止めようとする。

その様子を見ていた相手の戦車が砲塔をこちらに向ける。

人型が機関砲を構える。

BAKO!!

一気に状況が緊迫した瞬間、周囲に鈍い音が響き渡った

「このポケット!カスッ!現状が理解できんのか!?それに上官に対してあの態度はなんだ!!」

なんと、怒った佐藤大佐がその太った体でとび蹴りをかましたのだ。

自衛隊員とは思えない貧相な体型の中村は、まるでライフルで撃たれたように派手に吹っ飛んだ。

眼鏡が、89式が宙を舞う。

「……ゴホッ!ゲフ!!」

約一メートル先にわき腹から着地した中村は呼吸困難になつてむせた。

（一体何が起きたんだ？）

脳が事態を把握する前に、佐藤の放った第二波が彼を襲った。

「このタコがつー！！」

手加減抜きのキックが彼のわき腹を、本気のパンチが顔面を襲う。見る見るうちに貧相な彼の顔は月面へと変化していった。

「か、勘弁してください……」

必死に頭を手でかばいつつ中村が懇願する。
その様子を唾然としながら見ていた坂田は思った。

（タメ語吐かないでよかった……）

佐藤による中村への制裁……指導のおかげで、緊張していた現場の雰囲気は幾分か紛れた。

そして、中央にあったコンテナの山の陰から、一台の装甲車がゆっくりと出てきた。

アンテナのところに白旗をくくり付けてある。

どうやら軍使のようだ。

「班長、どうします？」

中村が戦闘不能になったため副長を引き継いだ松永が山口に尋ねる。

「大佐殿、軍使を受け入れますか？」

幾分か不安そうに山口が尋ねる。

すると、大佐は中村小突きながら言った。

「当たり前だろ」

「・・・と、いうわけです」

説明を終えた善行が椅子に座る。

ここは、昨夜山口達が徹夜で会議をしていた会議室である。

軍使を乗せた装甲車から降り立ったのは、奇妙な服を着た男だった。

青年は、善行忠孝と名乗った。

「善行とかいったな」

上座に黙って座っていた佐藤が口を開いた。

「はい」

直属の上司であった芝村準竜師（中佐）よりも一つ階級が上の佐藤が相手なだけに、必要以上に緊張してしまう善行。

「こっちの山口ってやつな。連中も貴様の言う『平成とか言う未来』から来たらしいんだが、貴様の言う『幻獣』とかいう物は知らないそうさ。これは一体どういうことだ？」

傍らに座っている山口を見ながら大佐が言う。

大佐の疑問はもつともだ。

今自分の横に座っている山口三等陸曹とかいうやつは、ソ連が攻めてきた平成という未来の日本から来たという。

実際、持っている装備に使われている技術力などは佐藤達の時代で無い事は明白であり、十分信じるに値する。

しかし、もう一方の善行とかいう奴の話によると、平成の世界というのは全世界のほとんど全てが『幻獣』とかいう奴等に制圧されているらしい。

そして、『幻獣』との戦いは1945年からずっと続いているらしい。

彼らのもつ装備も当然ながら佐藤の時代で作り出す事は不可能であり、『平成とか言う未来』から来た事は本当らしい。

ところが、山口は『幻獣』を知らないという。

そして、善行は『極東ソ連軍による武力侵攻』を知らないという。全世界のほとんどを制圧するような連中を知らないなんて事はありえないし、それと同時に他国が攻め込んできている事を知らない国民なんていうのもいない。

とすると、考えられるのはどちらかが嘘をついているということだ。

だが持っている物はどちらも未来の物。

大佐はだんだん頭が痛くなってきた。

「誰か分かりやすく説明してくれ」

考えるのがダルくなった大佐は椅子に座って言った。

「松永、今回は説明できそうか？」

山口が自分の向かいに座っている松永に助けを求める。

「一応は」

「よしやれ」

すぐさまGOサインを出す山口。

彼も現状がわからずに困惑している一人だった。

「まず最初に、パラレルワールド、平行世界について説明させていただきます」

黒板の前に立った松永が言う。

チョークで黒板の真ん中に縦線を引く。

「これが大佐殿の世界の時間の流れだと仮定します」

左右に一本ずつ、平行線を引く。

「左が私たちの世界。右が善行さんの世界の時間の流れです。」

この図を見ていただくと分かりやすいと思うのですが、平行世界とは自分の世界から見たほかの時間の流れの世界の事です。

さて、大佐殿は我々と善行さんの話が食い違うとお思いになられませんでしたか？」

「思った」

即答する大佐。

「我々は『幻獣』を、善行さんは『極東ソ連軍による武力侵攻』を

お互いに知らない。

通常ならばこれはどちらかが嘘をついているということになります。ところが、平行世界の存在を考慮に入れると別の考え方ができるようになります」

「つまり、善行さんは別の世界から来たという事か？」

山口が結論を言う。

「そうです。しかし、我々もそうです」

「なんだって!？」

「こちらへ来てから私はずっと違和感に囚われていました。

そして、昨日私物のノートパソコンを見て気がつきました。

この世界は、似ているようで我々の過去とは微妙に違います。

例えば、我々の歴史だと八木アンテナは外国企業に特許を取られています。日本軍によるレーダーの本格的な開発は第二次世界大戦後からです。

そして、この間破壊したチハ型の試作機が作られたのは1937年ごろです。

ついでに言いますと、我々の世界ではここまで蒸気機関は異常に発達しておりません」

たまたま堀の外の街中を眺める機会を得た松永は、異常に蒸気機関が発達していることに気がついていていた。

道を走る車、さまざまな装置、その全てが蒸気機関で動いていた。それも、元いた世界だったならばイージス艦のエンジンにそのまま技術を転用してやりたいほどの性能である。

「……どういうことだ？」

いまいち飲み込めない大佐が尋ねる。

「つまり、大佐殿の世界と我々、そして善行さんの世界は全て別の物であるという事です」

「「!?!」」

声にならない声を出す三人。

「本来、平行世界というものは混じりません。『平行』ですから。恐らく、何らかの力が働いてこのような事態が発生してしまったのでしょうか」

「何らかの？」

善行が言う。

「大体予想は付きます。

私たちの場合、攻撃機の爆弾の直撃。

そして、善行さんたちの場合は熊本城に集結した幻獣との決戦で発生したと想定されるエネルギーか何かだと思われます。

そして、時空の中をさまよっていたところで、電索の暴走に引き寄せられてここに現れた」

再び、雷鳴がとどろく。

表を見ると、かなりの土砂降りだ。

「ふえつくしゅ!!」

テントの前で歩哨をしている中村がくしゃみをする。

「畜生、あのデブめゝいつか殺してやる」

中村がそんなお約束をやっている時、会議室では今後の方針を決めていた。

既に、善行たち5121小隊は山口達と同じように銀座研究所に研究員として迎えられる事。

そして、整備班を動員して大介達の新兵器開発に協力し、大日本帝国に貢献する事がきまっていた。

「それでは、そちらの整備班の方たちと協力して、トランジスタやその他装備品の開発に全力を注ぎます」

呼ばれた長谷部が横にいる柴村に資料を渡しながら言った。

「聞くと、そちらの整備班の方々は女性らしいですからね、ウチの鏡花と話が合えばいいんですが」

「どうでしょう。個性的な人たちですからね」

善行の頭の中に整備班長、原 素子の笑みが浮かんだ。

美人なのは良い事である。

嫉妬深いのも浮気性に比べればましである。

しかし、ほかの女性と仲良くしただけで刃傷沙汰というのはいた

だけない。

「まあ、気が合うといいですね」

「そう願います」

「そうあってほしいですな」

日ごろ個性的な部下に悩まされている中間管理職三人がため息をついた。

「ちょっと！長谷部技監！どういう意味よ！！」

臨席していた鏡花が怒鳴り声を上げるが、それはため息を増大させる効果しかなかった。

小隊に戻った善行は、直ちに部下達に現状を説明した。

他の平行世界に飛ばされたというにわか信じがたい話に小隊の誰もが混乱したが、年齢的には学生とはいえ軍人である。直ぐに平静を取り戻した。

「それで？私たちはこれからどうすればいいのかしら？」

整備班長であり、一時期は善行の恋人であった原 素子が腕組みをしたまま尋ねる。

同性や下級生に絶大な人気があり、そっち方面の噂もある。

スカウト（随伴歩兵）の若宮 康光が惚れていて、FCをやっている（現在会員一名）

「整備班の皆さんには、こちらの技術者の方々と共同で兵器開発に励んでいただきます。」

当分の間、士魂号を使用するような戦闘は予測されませんので、各機から担当者を一名ずつ、交代でローテーションを組んでください」

「了解しました」

敬礼する原に頷きながら、今度はパイロット達の方を見る善行。

「各パイロットは機体の整備を手伝ってあげてください。」

普段三人でやっている整備を二人にしてやっていたのでは、能率が低下する上に他に事故が起きる可能性がありますからね」

「「「分かりました!」「」」」

元氣よく敬礼するパイロット四人。

三機なのになぜ四人かと言うと、三号機だけは騎魂号といって二人乗りだからだ。

「あの…」

三号機操縦者の速水が善行に声をかける。

「なんですか？」

「電子装備や駆動系に関しては自分にも多少知識があります。お手伝いできる事があればしますけど」

「整備班長、どうしますか？」

原の方を見ずに善行が言う。

「あら、速水君なら大歓迎よ。ねえ森ちゃん？」

傍らにいた部下、森 精華に話を振る。

「えっ！い、いえ、その・・・まあ・・・」

赤くなって下を向く森。

それを見て愉快そうに笑う原と露骨に不機嫌そうな顔をする舞。

「話はきまったようですね、早速荷物の目録付けとテントの設営を始めてください。

あちらから人員を分けていただける事になりました。必要ならば使ってください。それでは各自作業を開始」

直ぐに仮設格納庫の設営に掛かる小隊の面々。

その姿は若年とは言えども、さすがは軍人といえる。

「山口さん、でしたよね？」

離れたところで待機していた山口に善行が声をかける。

「そうです」

「早速ですがそちらの人員を分けていただけませんか？何しろこん

な巨大な物を三つも収容できる奴を作らないといけないので」

傍らにそびえる3機に目をやりながら言う。

「あっちのはどうするんです？」

着陸している2機の戦闘ヘリと、砲塔を下げている戦車を見やりながら山口が言う。

「あっちの方はこちらが終わり次第という事で」

「分かりました。それではウチの若い者を何人かお貸しします」

敬礼すると、後ろに並んでいる3人の部下達の方を向いた。

全員若い女がたくさんいるところに行きたくてうずうずしているようだ。

「坂田一士！松永一士！一歩前へ！」

坂田と松永が前に出る。どちらもうれしそうだ。

一方、抽選からもれた中村は悔しそうだ。

「俺と一緒にテント設営を手伝え」

「はっ！」

「了解です！！」

かなり元気よく敬礼をする二人。

自衛隊に入ってから以来最高の敬礼であった。

「あ、そうそう中村三曹」

思い出したように山口が言う。

「なんででしょう？」

階級が同じなので別に敬語を使う必要は無いのだが、相手はベテランの上に隊長なので敬語を使う中村。

常識的に考えて隊長と副隊長は同じ階級ではいけないのだが、中村三曹は野戦昇進の上に戦場での任命だったためにこの班はこのような変則的編成となっていた。

「中村三曹は只今を持って伍長に階級を変更。以後は佐藤大佐の下につくように」

「ええっ！？マジですか！？」

ただでさえ悪い顔色が更に悪くなる。

「これは命令だ。駆け足で大佐の下へ行き指示を貰え。以上」

冷たく言い放つと、山口は坂田達を連れて5121小隊のほうへ行ってしまった。

残された中村は暫く呪詛を唱えていたが、やがてあきらめたように佐藤のいる建物へと向かった。

「山口三等り、あー伍長です。お手伝いできる事がありますか？」

善行がいなかったの、仮設整備棟の付近で1番偉そうな人物に声をかける。

整備班とパイロットの中で、1番偉そうに見える人は誰かと5121小隊員に尋ねると、たいていの人は三号機ガンナーの芝村舞か、整備班長の原素子の名をあげる。

今回舞はテントの敷設を手伝っていたので、声を掛けられたのは原であった。

「あら？ 貴方は確か山口さんでしたかしら？」

小首を少し傾けて、顎の所に手をやる独特のポーズをとりながら原が答える。

5121小隊の中で、もっともオトナの色気に近いものを持っている彼女に思わず下半身が反応してしまう坂田。
たまらず前かがみになる。

「し、しみる…」

どうやら彼は新人自衛官研修の時になったインキンが直っていなかったようだ。

ナニを抑えて涙目になっているその姿は、無様以外の何者でもない。

「彼はどうしたの？」

いきなり前かがみになった坂田を不思議そうに見る原。
その視線を遮るように坂田の前に回りこむ山口と松永。

「な、何でもありません！きっと具合でも悪いのでしょう！」

「き、きつとそうでしょう！」

「「わ、わははははは」」

二人してぎこちない笑い声を出す。

「……大丈夫……ですか？」

二人が必死になって原の注意を逸らしている時、いつのまにか坂田に近寄って声を掛けた女性がいた。

「き、君は？」

股間から這い上がってくるなんともいえない痒みや痛みと戦いながら坂田が尋ねる。

「……石津……萌、です」

やや俯きかけで暗めな彼女は黒魔術の使い手でありながら衛生官である（！？）

髪型とかを変えてみると意外と美少女だと思われるのだが、現状では少女漫画のいじめられ役である。

幸いな事に5121小隊ではそんな小さな事を気にする人間はいなかった。

ちなみに、5121小隊は年齢的にはほぼ全員が高校生である。

もしこれが我々の世界であつたら『子供の権利条約』などに引っ掛かるのだが、彼らの世界では1945年からずっと続く幻獣との

戦いのために、そんな条約もないし、戦争に子供を投入する事をいちいち反対するような人間もいなかった。

「山口伍長です。原整備主任に言われてお手伝いに参りました。何なりとお申し付けください」

パイロットが相手と聞いてやや緊張しながら山口が言う。

勿論敬礼しながらである。

その後ろには、実物のロボット兵器を前に緊張して敬礼する松永と、片手でナニを抑えながら敬礼する坂田がいる。

「それではテントの設営を手伝ってもらおう。厚志、手伝ってもらえ」

支柱のボルトを締めていた舞が顔も上げずに言う。

「それじゃあお願いしまーす！」

天井の部分に当たるところから速水が叫ぶ。

整備用の薄汚れたツナギに工具箱という姿だが、何をしても美少年は絵になるから羨ましい。

「そちらまで行けばいいんですね？」

山口がそれに答える。

その視線はジーンパンにバンダナ姿の三号機整備員森精華に注がれている。

ちなみに、視線が注がれている理由は、60%がそのスレンダーな体で、残りの40%は（いつの間にあそこまで行ったんだ？）という疑問だ。

「こわい、かゆい、さむい」

パイプにしがみつकिながら坂田が言う。
みっともないことこの上ない。

「そちらのかたどうしたんですか？ 具合でも悪いんですか？」

ボルトを締めつつ速水が言う。

「気にしないで下さい。仮病です」

こちらもボルトを締めつつ山口。
インキンだなんてみっともなくて言えやしない。

「へー、あの機関砲はそんな大きな口径を使用してるんですか！」

「そうなんです。おかげで整備の時は大変なんですよ。トリガーだけでもかなりの重さですから」

「そういえば、あの端っこの奴だけ背中が大きいですね。複座型ですか？」

「！！よく分かりましたね。あれは騎魂号と言って複座型の機体なんです。機動力の低下を電子装備やマイクロミサイルを搭載することによってカバーした奴なんです」

「へー、じゃあやっぱりパイロットとガンナーに別れてるんですか

「？」

「はい」

「なるほどなるほど」

松永は森との会話に熱中しているようだ。

二人ともボルトを締める手は数分前から止まっている。

「なあ、あの二人ほっというてええん？　まずいんとちゃう・・・って、あんた仕事せんかい！！」

指揮車運転手兼事務員の加藤祭が指揮車の整備を手伝っていたはずなのに、いつのまにか奇妙なダンスをしていた岩田裕にキレる。

加藤は事情を知らない人がしゃべると関西人と思われがちなのだが、実際には熊本育ちの熊本人（そんなのあるのかな？）である。

赤い髪と関西弁、そして明るさがトレードマークの女の子である。テロによって足がつかえなくなり、車椅子に乗りながらも整備員をやっている狩谷夏樹に恋心を寄せるも、相手方からは結構煙たがられている。

そして、彼女が頭に来ている相手——死体でさえもつとまじだと思える顔色に赤い塗料で奇抜なメイクをし、それはそれはステキなセンスの服を着込み、例えば自分が民間人であっても、道端で出会ったら逮捕せずにはいられない言動をとる男——は、岩田裕。通称はイワタマンらしい。

彼についてのコメントは、取扱説明書・・・小隊人事資料から抜粋したい。

『ギャグ好きでつねに踊っている、アブナイ男』

どうやら、世の中の大人たちにはまだまだ見る目はあるらしい。もつとも、入隊を許可した時点で見る目はないと評するべきかもしれないが。

「フフフフフ、電波がきてますよう！」

全身をくねくねさせながら岩田が言う。
その姿は不気味の一言だ。

「てめえ、そのきもちわりい踊りは止めろって言ってるだろお！」

いきなり岩田の後頭部に拳がめり込む。

後頭部に叩き込まれた運動エネルギーを吸収しきれず、岩田の体が数メートル吹っ飛ばされる。

体を宙に浮かせたまま、停車している戦車に激突する。

岩田の激突した個所の直ぐ横で作業をしていた整備員遠坂圭吾が驚いて持っていたスパナを投げてしまう。

放たれたスパナは鋭い円を描きながら離れたところでテントの支柱にボルトを締めていた茜大介目掛けて飛んでいく。

「ふんっ」

飛んできたスパナを自慢の美脚で跳ね返すと彼は鼻を鳴らした。
茜大介。彼の名を尋ねると、たいていの者はこう言う。

「今度会ったらクロス」

はつきり言って彼の性格の悪さはギネス級である。

同小隊に所属する、温厚で有名なA・Hパイロット候補生（当時）はこう証言する。

「始めてあった時、まるで天使のようだと思ったんです。彼はそれほど整った素晴らしい顔立ちをしているんです。

ところが、その口から出てきたのは：今思い出しただけでも腹が立つ。十円くれてやるだど？間抜けな顔だど？ククク、いつかその言葉を後悔させてやろうと誓いましたね」

温厚なA・Hさんをしてこう言わしめるのだから、彼がどんな性格であるかがわかるであろう。

ちなみに、A・Hさんが誰か気になった方は、この前の話を見てください。多分分かると思います。

さて、茜が蹴り飛ばしたスパナがどこに行ったかというところ・・・

「・・・いたい」

薄幸なことで有名な整備員田辺真紀の後頭部を直撃していた。

茜の蹴りによって運動エネルギーが増大したスパナは、ブーメランのように回転しながら支柱や足場を避け、驚異的確率で彼女の後頭部を直撃したのだ。

着弾の衝撃で彼女の眼鏡は地面に落ちて割れてしまったのだが、日ごろから突然落ちてきたタライなどによって眼鏡が割れる事に慣れていた彼女は、すぐさま予備の眼鏡を装着していた。

さて、この騒ぎの発端となった岩田を殴り飛ばした人物の名前は

田代香織。

やはり整備員である。

茶髪に乱暴な言葉づかい、キツイ性格と一見どころか二見三見しても不良少女の彼女だが、腕っ節の強さと友情、仲間意識などの人情関係に関しては高い評価を得ている。

「な、なあ速水くん。オレの弁当・・・やるよ」

岩田の事は忘却の彼方に追いやった後らしい。

第六話『工場建設』

整備テントの方で騒ぎが起きていた頃、研究棟では長谷部を中心としたトランジスタ開発班が国産トランジスタ第一号を完成させていた。

製造法も原理も知っている長谷部と鏡花にとって、初歩的なトランジスタを作る事など造作もなかった。

手早く素材を揃え、さっさと第一号を完成させた長谷部達は、大介達に技術的な説明をした後に今後何をするかを説明していた。

「次に、今後何をするかですが」

大介が電索の説明に使った黒板に『技術力向上計画』と書くと、国産トランジスタ第一号を取り出す。

「ひとまずは、このトランジスタを量産できる体制を整えます。いつまでも手作業で作るわけにもいきませんから」

「質問」

岡村が手をあげる。

「量産すると言っても、具体的にはどうするんだ？俺達は三菱とかの連中とは違って、そういうことには疎いぞ」

「まず最初にやるのは、我々専用の工房を作る事です。幸いな事に、ここ銀座研究所には意外と土地があまっていますからね、小規模な工場の一つや二つは作れるはずですよ。」

工場の建設と同時に、製作用の工作機械も購入します。また、工作機械一基に一つモーターを付けます」

「一基に一つ!？」

長谷部と鏡花を除く全員が素っ頓狂な声を出した。

現在、工作機械には一基に一つそれぞれモーターが設置されている。

だが、この時代の日本には、そのような贅沢をする余裕はなかったのだ。

結果として何をしたのかといえば、革命的発想に基づき、一つのモーターを最大限活用できるように、その動力を他の機械へ伝達できるように工夫したのだ。

足らぬ足らぬは工夫が足らぬとは後のこの帝国の標語であるが、その精神はこの時点で確かに根付いていた。

とはいえ、それをする事によって犠牲は発生する。

この場合の犠牲とは品質の均一さであり、生産速度であった。物づくりという視点で見れば致命傷だ。

長谷部は、国営であるのをいいことに、資金に糸目はつけずあえて一基に一つモーターを付けようと言うのだ。

「そ、そんな資金はありませんよ」

大介が言う。

佐藤大佐は、電索計画開始の時に指定の予算以外はびた一文出さないとはっきり言ったのを思い出したのである。

しかし、うろたえる大介を尻目に長谷部は自信満々だ。

「ご安心を。大佐殿は任務遂行のためには多少は資金を自由に使っても良いと仰っていましたから」

「ええっ！？あの大佐が！？」

まさにびっくり仰天の大介。

「はい。というわけで早速発注しましょう。工作機械やモーター、資材や工員など注文する物は幾らでもあります」

工房の建設資材や、工作機械の購入はすんなりと決まった。

佐藤大佐が手を回し、陸軍省の命令書を作らせたからである。

さすがに大日本帝國陸軍たつての依頼とあつては最優先で準備しないわけにはいかなかった。

関東全ての関連工場に本社から指示が回り、納品予定だった物全てが強制的に銀座研究所に送られた。

「いやゝ陸軍さんのごり押しは天下一品ですな」

あつという間に揃えられた資材を前にしながら長谷部が満足そうに呟く。

「民主主義だったら、例えば国家の一大事でもここまで強引には出来ないでしょうね。軍国主義様様といったところでしょうか」

その隣でクリップボードに挟んだリストにチェックをしながら鏡花が言う。

話しながらも手は次々と仕事をこなしている。

「どれくらいそろったんだい？」

「大体90%くらいですが、残りはトランジスタ用の原料ですから

問題ないと思います。

工房のほうはお任せください。それより、トランジスタレーダーの方はどうなんですか？」

「ああ、高橋博士を初めとしたこちらの技術団は思っていたよりも優秀だったらしい。既に試作一号は出来上がったよ。

ついでに、空いた時間を使って海軍工廠の若手連中と面白い物を作ってみた」

チェックを付けていた鏡花の手が止まる。
嫌そうな顔をしながら長谷部の方を向く。

「長谷部技監。まさか、また技術者を煽って余剰予算で勝手なことを・・・」

「しっちゃった」

ウインクをしながら少し舌を出して長谷部が言う。

「今回は陸自で使ってる155mm榴弾砲の廉価版を三門作ってみました。

さすが大艦巨砲時代！現代の技術を知ってるだけ教えたら、この時代の冶金技術の許せる範囲内で最高の強度を持ちながらも極端な軽量化に成功しました。

射程や連射性能は現代の物より少し劣りますが、それでもこの時代のものよりは遥かに優れた物です」

「またそんな物を作って、前に技本（技術研究本部）でやって叩かれたのを忘れたんですか？」

あきれ果てた様子の鏡花。

長谷部は、技本の本部長に就任した年に若手の研究者十数名を煽り、所内で各研究で余って贈賄用に溜められていた資金を全て使用して新型の装甲車を勝手に開発したという前科があった。

使われた予算は本来存在してはいけない物の上に、幾つもの大学のさまざまな学科を主席で卒業したIQ230の万能研究者と国防装備開発の若手達を首にするわけにもいかず、かといって無かった事にするにはあまりに高性能なおかげで事なきを得たが、危うく解雇どころか逮捕されるところであった。

結局極秘裏に開発されていた事になったが、組織の枠を超えての活動に当時の政府からは散々叩かれた。

「大丈夫ですよ、佐藤大佐に見せたら大喜びしていましたから。

明々後日に陸軍の高級官僚を集めてお披露目をしてくれるそうです。もっとも、高級官僚とは言っても佐官だけだそうですが」

「それではそちらは長谷部技監にお任せします。工房のほうはお任せください」

「わかった」

長谷部の返事を聞いた鏡花は軽く頭を振りながら工員達に指示を出すために積み上げられた資材のほうへと歩いていった。

昭和元年4月18日 千葉県九十九里海岸某所 AM10:00

海岸に設けられた陣地に155mm砲三門が配置されている。

場所は電索の性能試験にも用いられた例の場所である。

「目標敵艦、距離15000!」

巨大な155mm砲に取り付いた砲兵達が照準器を操作し、砲弾と装薬を装填する。

ちなみに、装薬とは砲弾を飛ばすための火薬の事である。沖合いに浮かぶ敵艦に三門の照準が揃えられる。

「射撃用意!照準良し!!」

「砲撃許可でした!」

無線機で許可を伝えられた兵士が叫ぶ。

「砲撃用意!耳を塞げ!射撃5秒前、4、3・・・」

班長が秒読みを始める。

その間に班長と照準手以外は耳を塞いで口を開く。口を開いているのは、射撃に伴う気圧の変化に対処するためである。

「・・・2、1、撃え!!」

発射レバーを引いた瞬間、巡洋艦の主砲ほどもある巨大な155mm砲三门が火を噴いた。

放たれた三つの155mm砲弾は、衝撃波でさざなみを立てながら15000メートル彼方の敵艦に突き刺さる。

真っ赤に輝く砲弾が吸い込まれると同時に、敵艦は十メートルクラスの水柱三つを立てて消し飛んだ。

水柱が収まる頃、敵艦は跡形もなくなっていた。

「…いかがですか閣下？」

現場から離れたところにある本部にいた米田帝国陸軍中將に佐藤大佐が声をかける。

「おう、結構な物作るじゃねえか」

「恐縮です」

一応頭を下げる大佐。

佐官同士の繋がりや個人的なルートから、目の前の貧相ながらも日露戦争の英雄である男の今の仕事を一部なりとも知っているのにも関わらず、他の将官に接する時と同じ態度である事はある意味立派ではある。

「時に、佐藤とかいったな」

椅子に座り、軍刀を地面につきたてながら米田が言う。

「はっ」

「どうやってあんな物をこしらえた？」

「ウチの研究員達の努力の賜物です」

隣のテントで実験の成功を喜んでいる研究員達を指差しながら大佐が言う。

彼は真面目に努力する自分の部下達に感謝していた。

少しパイプを生かして資金を調達したりするだけで軍内部での自

分の地位が上がるから。

「ほう、ずいぶんと立派な部下を持ってるようじゃねえか、結構結構」

満足そうに言いながら研究員達の方を見る米田。

早くも撤収の準備を始めている彼らの方を一人一人見ていく。

大介から順に見ていったその視線が長谷部に向く。

その瞬間、米田の目が細くなる。

「あいつは誰だ？」

佐藤大佐に尋ねる。

「あいつ、と申しますと？」

誰を指しているのかは大体想像がつくが、一応訪ねる佐藤。

「あそこの、綺麗なネーちゃん横に置いてる奴だよ」

指差す方を見してみる。

どうやら長谷部の事を言ってるらしい。

「ああ、彼はこの間新規採用した長谷部という研究員です」

「あいつ、ただの研究員じゃねえな」

自分達の世界の住人とは微妙に違う『何か』を感じ取った米田が言う。

「……おっしゃる意味が良く分かりませんが？」

穏やかな表情をしつつも内心はドキドキしながら佐藤。

「へっ、オメエも役者だなあ」

「はあ……」

困惑したような表情を浮かべ、あいまいな返事をしながらも、佐藤の頭の中では早速米田に対する作戦案が作られていく。

「さてと、用事が出来たんでな、これで帰らせてもらうぜ」

米田が立ち上がる。

「そうですか。それでは」

敬礼する佐藤。

退場する米田に気がついた他の佐官たちも立ち上がって敬礼をする。

「おう」

それに片手を挙げながら答えつつ退場していく米田。

それを見送りながら佐藤大佐は内心焦っていた。

（まずいな、よりにもよって米田に感づかれるとは。何か手を考えなければ…）

研究所に帰った大佐は、早速陸軍省に電話をかける。

「こちらは銀座研究所。佐藤大佐だ。陸軍参謀本部内線3416、小林少将。大至急だ」

暫くした後、かなりだるそうな男が電話に出る。

「何ごとだ大佐？」

「まずい事になりました少将閣下」

「今度はなんだ？」

「私の研究所の内情を、米田中將が探ろうとしているようです」

「わかった。それなりに手はまわしておく」

「ありがとうございます」

「あまり面倒事は起こさないでもらいたいな」

「努力します。それでは」

要件だけ済ませると、大佐は電話を切った。

翌日から水面下での諜報戦が開始された。

米田中將は陸軍内部での自分の発言力と手駒を最大限に利用して、

銀座研究所に関する全ての情報を集めようとする。

ところが、東京憲兵隊とも深いつながりがある小林少将の力は強く、会計局や工事に携わった業者達は一切口を開こうとはしなかった。

更に、新兵器の開発施設であると言う事と参謀本部直属である事から、施設や職員に関する情報もほとんどが部外秘扱いで手にいれることが出来なかった。

書類は手に入らず、関係者は口を閉ざす。

しかし、それであきらめる米田ではなかった。

連日銀座研究所を監視し、外部からの接触と内部の動きを探らせ、ちよつとした用事で中に入った者や、日用品の出入り業者を捕まえ、話を聞こうとした。

当然ながら小林少将も黙ってみていたわけではない、陸軍中野予備校卒業生を新規に大量配属して米田配下の物が情報を得られないように裏工作に奔走した。

関係者の口裏を合わせ、書類を隠蔽し、業者には多額の金を配って口封じをした。

永遠に続くと思われたこの諜報戦だが、小林少将が奥の手を使つた事により一挙に終結した。

参謀本部から、米田中将に対して命令書が来たのである。

銀座研究所に対する一切の諜報活動をやめるようにと。

さすがの米田中将も、これをやられてはどうしようもなかった。やむおえず部下達を撤退させ、銀座研究所を巡る諜報戦は終結した。

さて、そんな事は露知らず、長谷部達を中心とした近代兵器開発

班は順調にその任務をこなしていた。

鏡花の指揮のもと、工房ではトランジスタが次々と生産され、長谷部がそれを使った精度の高い工作機械を製造する。

その工作機械を使って、長谷部と鏡花がより安価な、高性能なモーターを作る。

その装置を大介達に解説する。

これの繰り返しによって、工房の工作機械はどんどん進化していった。

時に昭和元年5月20日、銀座研究所はついにICの製造に成功した。

ガラスによって仕切られ、そして無数のフィルターを設置した換気装置が唸りを上げる室内で、二人は飛び上がって喜びを表現していた。

「長谷部本部長、ついにやりましたね」

白衣姿の鏡花が言う。

「お疲れ様です。しかし、まさかこんな短期間でICまで漕ぎ着けるとは思いませんでしたよ」

椅子にだらしなく座りながら長谷部が答える。

「さすがは本部長ですね」

「いえいえ、鏡花さんがいてこそ出来たんですよ」

「早速レーダーに搭載しますか？」

「そうしよう。そういえば大介さん達は？」

「あちらで近接信管砲弾完成のパーティーをしています」

かなりにぎやかな研究棟を指差しながら鏡花が言う。

「それじゃあ早速ICで色々作ってみますか」

そういうと長谷部は陸上自衛隊で正式採用されている個人用通信機を取り出した。

「これくらいならば作れるでしょう」

「部品は一から作る事になりますけどね」

また工房の生産ラインを修正しなければならないのかと思うとうんざりする鏡花。

「そんな嫌そうな顔をしないで下さい。工房の生産ライン改正は当分ありませんよ。ICは当分ここでの製造となりますから」

「助かります。いちいち機械をそろえ直すのもいいかげん飽きてきましたから」

これでガン飛ばしてくる会計官とそう何度も会わなくてもいいのかと思うと救われた気持ちになる鏡花。

しかし、不意に疑問を覚える。

「それじゃあこれから電子機器はどうやって作るんです？」

「じつはね、こんな物を大佐から頂いたんだ」

懐から一枚の書類を出す。

「これは・・・工場の権利書！？」

「この間閉鎖された三菱の工場を政府が買い取ったんだけど、使用道がなくて困ってたんだって」

「しかし、これだけの工場を維持するとなるとかなりの資金がかかりますよ」

「そのためのICさ」

「というと？」

「もうすこし高集積化したICを使ってラジオを作るんだ」

「なるほど、それで得た資金を使って開発をするよ。」

しかし、トランジスタでも十分なのは・・・なるほど、真似をさせないため、ですね？」

「そう、相変わらず君は飲み込みが早いね」

うれしそうに長谷部。

本来ならば、トランジスタを強化していくだけで十分ことは足りるのである。

しかしながら、過去の技術を発展させただけのものでは、敵にい

つ応用されてしまうかわからない。

そのため、真空管↓トランジスタ↓ICという流れを理解できないように、ICを使った物を実用化するのだ。

万が一敵にそれが渡っても、真空管↓？↓謎の部品となり、それでは利用できない。

基礎部品の開発段階で敵に鹵獲されたときの事を考えるという、当時としては実に画期的な考え方であった。

「ありがとうございます。そうと決まれば早速始めましょう」

「うん」

天才肌の技術者二名にかかれば、ICの高集積化など造作もないことだった。

まあ、天才肌であるだけではなく原理を知り尽くしていると言うのもあったが。

それはとにかくとして、ICラジオの製作は快調であった。

高集積化ICの製造がはじまってから一週間後には第一号が、その翌週には量産型の増産が開始された。

しかし、規模が小さいためにそれほど数が揃えられるわけではない。

にもかかわらず、長谷部は販売を開始した。

発売から一ヶ月、朝日新聞の第一面はこうであった。

『帝國陸軍正式採用ラジオ、品薄のために更に値段高騰』

『全國に広がる販売を求む声』

政府が正式に採用した物を民間に売り出し、わざと品薄にして大衆をじらす長谷部の商法は大当たりした。

大日本重工業と名づけられた長谷部の工場の電話は連日鳴り続け、商品を求む各地の国民の声を伝えた。

初期と第二次・第三次出荷版の利益で量産したIC用工作機械をそろえた長谷部は、ようやく大規模な増産を開始した。

連日工場に材料を満載したトラックが入っていき、完成品を載せて日本各地に向かっていった。

ICラジオがそこまで大衆に受けた理由。

それはICを使用しているために従来のラジオに比べて遥かに高くなっている性能と、大量生産、流れ作業化などによるコスト削減、そして研究開発費の上乗せがなかったためである。

基本的に、先端技術という物とはにかくお金がかかる。そのため、その設備投資は初期製品の価格に上乗せされる。

そして、費用の回収とともに次第に値段は下がっていく。

ソ○ーのプレス○を見てもらえれば分かりやすいであろう。

この開発費が上乗せされないと言う事は、プレ○テが初めから20000円でデュアル○ヨックが付いているということなのだ。

売れないはずがない。

長谷部の下には莫大な額の資金が転がり込んだ。

その資金を元手に、長谷部は次の商売を考え付いた。

新型レーダーの販売である。

帝国陸軍銀座研究所との強いコネを活かし（強いも何も長谷部は銀座研究所の研究員である）新型レーダーの発注を一挙に請け負ったのだ。

このため、従来よりも12%安い値段でレーダーを開発する事が

出来、陸軍各基地に次々とリーダー設備が設けられた。

リーダーの配備と同時に、電索担当士官要請校も創設し、国からの補助金を受けつつ優秀なリーダー技師の育成に努めた。

ここまで短期間で大きな業績を納められたのは、鏡花の活躍があったからである。

経済学と経営学、心理学などで博士号を持っている彼女は、いかに労働者に負担を感じさせずにコストを削減できるかを必死に考えた。

そして、極度の自動化とそれを管理運営するための熟練工の育成に力を注いだのだ。

工業系の大学を出た学士達のエリート意識をうまく利用し、能力給で学習意欲を煽った彼女の戦略は見事に成功したのだった。

昭和元年7月11日 大日本帝国陸軍銀座研究所

さて、長谷部達が大活躍をしていた間、大介達は何をしていたのか？

当然ながら遊んでいたのではない。

長谷部から教わったICの技術を自分達で見直し、それをいかに兵器に盛り込むかを話し合っていたのだ。

「それじゃあ会議を始めるぞ」

白衣姿の大介が黒板に『電子兵器草案提議会』と書く。

「例の電索は陸軍各基地で大好評であった。今回はこれを上回る物の開発だ。各員の活発な議論を期待する」

「提案」

いきなり岡村が手をあげる。

「長谷部さんの言っていたC I W Sとか言う奴を砲に転用するのはどうでしょう？」

「なるほど、レーダー連動砲か。いけそうだな、じゃあ君はその担当な」

「わかりました」

「次、自分です」

今度は斎藤が手をあげる。

「どうぞ」

「例の5121小隊のヘリコプターとか言う奴に使われている航空機用エンジン、あれの量産化をやってみたいです。」

あれくらい高性能なエンジンを使う事が出来れば、時速700キロくらいは軽く出すことが出来ますし、重装甲で大量の爆弾を積んだ爆撃機を作る事も出来ます」

「よし、任せる。俺は詳しくはわからないので、あちらさんと共同でうまい事やってくれ」

「はい」

「それじゃあ俺ですね」

柴田が立ち上がる。

「俺はトラックや戦車に使われているエンジンをやってみようと思っ
ています。あれを量産できれば、従来の戦車の数十倍もの性能を
もつ戦車が作れるかもしれません」

「任せる」

「小隊長はどうするんで？」

早くも長谷部から借りた専門書を調べ始めた岡村が尋ねる。

「俺は長谷部さん達の持っている89式とか言う小銃をどうやって
量産するかを調べてみる事にするよ」

「とかなんとか言っちゃって、もう試作第二号に入っちゃってるく
せに」

黒板を消していた柴田が茶々を入れる。

「ははは、やっぱばれてた？」

頭を掻きながら大介。

「夜中に人の宿舎に押しかけて、無理やり祝杯上げたの誰ですか？」

ジト目の柴田。

一昨日、廉価版89式小銃の試作に成功した大介は、89式とお

酒を持って夜中に柴田の部屋を強襲していたのだ。

下戸だからやめてくれと懇願する柴田に無理やり酒を飲ませた大介は、そのことをすっかり忘れていたらしい。

「そ、そんなことあったっけか？」

滝のような汗を流す大介。

「ま、いいですけどね。それより、試作第二号はどうなんですか？例の三点射撃とか言う奴は出来そうなんですか？」

三点射撃とは、その名の通り弾を三発ずつ発射する機構である。三発ずつしか出ないため、弾薬の浪費を抑える事が出来るが、その代わり機構の複雑化をまねいてしまう。

精密さを求めるあまり、値段が高騰してしまういかにも自衛隊らしい機構である。

「出来るには出来るが、あれだと整備がきつそうなんでな、連射に変えた。試作二号からは安全装置・単発・連射の、ア・タ・レでいくことにした」

「小銃だけに当たれですか。いいですね」

「でしょ？」

にこやかに大介。

89式小銃の前任者、64式小銃のことを知る自衛隊員たちが聞いたら、その偶然に啞然としていたであろう。

なぜなら、64式小銃も安全装置・単発・連射のアタレとなっていたからである。

「あれ？ 5. 56mm弾は出来たんですか？」

不思議そうに斎藤が言う。

それを聞いた研究員達があきれたような目で彼を見る。

「先週できたってみんなで飲みにいったろ？」

岡村が言う。

「そうでしたっけ？」

あれ？という感じで斎藤が言う。

「さて諸君！研究に取り掛かろう！！」

「了解！！」

ボケた斎藤を置いて、研究員達は各々の仕事に取り掛かった。

兵器開発が順調に進んでいる事を祝福するかのように夏の日差しが降り注ぐ空港に、一組の夫婦が降り立った。

青年の方は帝國海軍の正装に身を包み、女性の方は青を基調とした薄手のワンピースを着ていた。

「ここが貴公の生まれ育った国、日本か」

女性が、実に感慨深そうに言う。

「ブルーメール家を捨てて、本当に良かったのかい？」

青年が不安そうに言う。

「何を言うか！・・・それとも、貴公は私と共にいるのが嫌なのか？」

女性が潤んだ瞳を青年に向ける。

首を振った拍子に、豪華な金髪がふわりと揺れる。

「そんな事はないさ！ただ、君がなんとなく不安そうだったから、つい、な」

必死の形相でそれを否定する青年。

海軍士官らしい、実に歯切れの良い発音と、実直そうな顔立ちのおかげで、それは一点の疑いも持てそうにないものだった。

「不安？不安であるはずがなろう」

当然のように言い切る女性。

欧州人らしい、実にくつきりとした顔立ちと、妙に気品のある振る舞いが、女性の言葉を更に強調させる。

「本当に？」

「ああ・・・」

そこで女性の声音は一気に小さく、そして優しくなる。
一拍置いた後、彼女は言った。

「貴公が、いるからな」

下を向き、真っ赤になる。

二人の間に沈黙が流れるが、次の瞬間、二人はお互いの名を呼びながら抱き合った。

「グリシーヌ！」 「大神！！」

改めて愛を確認した二人を祝福するかのように、太陽が空に輝いていた。

第七話『大日本重工業』

昭和元年8月20日八王子郊外 大日本重工業本社

5月20日にICの製造に成功して以来、銀座研究所はICを利用した電子兵器開発に加え、戦車と航空機用エンジンの開発にも着手した。

いくら長谷部が万能とはいえ、さすがにエンジンまでは専門外だった為の開発初期はまったく方向性が定まらなかった新型エンジン開発計画だが、5121小隊整備班や一緒に来ていた戦車兵やヘリ隊員の協力を得てからはとんとん拍子に進みだした。

現在所有している戦車のエンジンに使われている材料を作り出すのに10日。

エンジン各部品用専用電子制御式工作機械の試作型製造に17日かかった。

原主任を中心とした5121小隊整備班は、実に良く働いた。

陸軍中から集められた若手の設計技師達に連日交代で原理の説明を行い、現代の技術を伝えるという難解な任務をこなし続けた。

馬力を出すためにはどうしたら効率が良いか？高圧に耐えうるエンジン材質とはどんな物か？燃費を節約しつつ高出力を出す事が出来るエンジンを作るには？

学校で習った事、整備を通して学んだ事、知ってる限りの知識を惜しげなく披露する原達に感銘を受けた設計技師達は、その全てを記憶すると言う方法でそれに答えた。

平成と昭和の技術者達による時代を超えた二人三脚の努力は、試作の工作機械完成から5日経った7月1日、大日本重工業第一工作

機械試験場で実を結んだ。

「空冷2サイクル10気筒ディーゼル、720馬力。我が帝國が世界に誇る事が出来るエンジンです」

エンジンが轟音を立てている試験室からガラスを隔てたところにある見学室に訪れた陸軍佐官達を前に、柴田が誇らしげに説明をしている。

「現在世界に存在するありとあらゆるエンジンの遙か上を行く性能でありながら、新機軸をふんだんに盛り込んでいるために燃費も良好です。

また、35t前後の戦車でも、最高時速50km前後を出す事も出来ます」

その言葉にどよめきが生まれる。

この時代、時速50kmをだす乗り物といったら、何もない直線道路で全力疾走をした自動車か機関車くらいである。

もし、戦場を時速50kmで戦車が疾走したらどうなるか？
ましてや35tのが、である。

野砲ですら涼しい顔で跳ね返しながら野砲並の主砲を撃ち、搭載した数門の機関銃で敵兵をなぎ倒す……

考えただけでも武者震いが起きる。

「資金や材料調達ならば可能な限り協力させていただきます！」

若い少佐が叫ぶ。

その言葉の裏には、開発に貢献した自分達にそれを優先的に回して欲しいと言う本音が隠されている。

壁際に立ってその様子を見ていた佐藤大佐は、にやりと笑い「協

力に感謝する」と言う。

その様子に触発された他の中佐が叫ぶ。

「こちらも資金を出します！材料は製鉄所から良質の鉄をまわしてもらえるように交渉します！」

「悪いな」

再びニヤリと笑いながら大佐が言う。

「私達も資金ならば！」

首都を預かる第一師団の青年将校が叫ぶ。

「材料ならばお任せを！」

「資金ならば幾らでも！！！」

たちまち見学室の中は協力を申し出る佐官達の声で満たされた。

見学室での一件以来、柴田主導による『新型エンジン開発計画』は『新型戦車開発計画』に姿を変えた。

計画の指導者は柴田から長谷部に移り、ノートパソコンから取り出した74式戦車の設計図を元に、74式改め零式重戦車の設計手直しと試作が開始された。

設計図があることから、試作はすぐさま行われた。

先を見越した長谷部の指示により既に準備されていた74式のパーツが次々と銀座研究所に運び込まれ、横浜の造船所から派遣され

た一流の溶接技師達によって組み立てが始まった。

「見事な物ですなあ」

主砲である105mm砲が取り付けられようとしている零式重戦車を見ながら佐藤大佐が言う。

「ありがとうございます。これもひとえに大佐殿のお力があってこそです」

大佐の横に立っていた長谷部が言う。

「それもあるがな、貴様の能力がなければここまではいかんだろう？」

「まあ、それもないわけではありませんがね。ところで大佐、朝から岡村さんと斎藤さんを見ないんですか・・・」

「ああ、あいつらなら確かどこかに行くとか言ってたぞ、どこだったか忘れたが、俺の部屋に外出許可書がある、探させるか？」

「いえ、用事があるのなら仕方ありません」

「貴様も用事があるんじゃないのか？」

「いえ、こっちの研究が一段落したので、どちらかのお手伝いでもしようかと思ひまして」

「結構なことだ、まあ帰ってきてからにでもしろ」

「はい」

そこで急に大佐は笑顔になって言う。

「時に長谷部くん」

「はい」

「酒はのめるかね？」

「まあたしなむ程度なら、ですが」

「よし、それでは早速飲みにいこう！ウォッカとかいうアメリカの酒が手に入ってな、これが結構いけるんだ！！」

「わかりました、早速行きましょう！」

それはロシアのじゃないのか？と心の中で指摘しつつも喜んで答える長谷部。

たしなむ程度と言いつつ、彼は重度のアルコール好きであった。

「よし、せっかくだから他の研究員も参加させよう、長谷部くん、至急全員を会議室へ」

「了解しました」

「あ、衛兵司令も連れて来い。あいつが酔っ払ったところも見てみたい」

「はっ」

こうして、研究員達は憲兵隊長も連れて会議室へと消えていき、この研究所から責任者と呼べるものはいなくなった。

そして、そんな時に限り、厄介ごとは発生するのである。

全ての研究員と〇〇長と付く人間が会議室で酒宴を行っているころ、帰国した大神中尉は米田中将の付き人として銀座研究所を目指していた。

先日行われた佐官級による会合で広まった35t戦車の真意を探るためである。

公用車には大神と運転手の少尉、そして米田が乗っていた。

「本当に時速50kmで爆走する35t戦車なんていうものが作れるんでしょうか？」

後部座席に座っている米田中将に大神が言う。

「理屈の上じゃ出来るらしいと紅蘭が言っていたぞ。もっとも、そのためには700馬力以上出せないといかんらしいがな」

米田が答える。

今日の格好は155mm砲の試射を見学した時と同じ中将の正装である。

「と言う事は、彼らはそれだけの馬力を出せるエンジンを開発したということになりますね」

「ああ、だがよお大神」

「はい」

「それだけの出力を出せるエンジンとなると、小型化にもそれ相応の技術が必要だ。しかし紅蘭はそんな技術は帝國どころか世界のどこにもないっていいやがる」

そこで米田は声のトーンを落とす。

「少なくとも、この世界には」

「どういう意味で・・・」

「どういう意味です？　というとした大神の前に一枚の写真が突き出される。」

「これは？」

「見てみな」

渡された写真を見してみる。

そこには、上部に天幕が張られた状態で整備されている巨大な戦車と上にプロペラがついた見たこともない物が写っていた。

「これはなんなんですか？」

不審げな顔をしながら大神が言う。

「加山の奴に写真を撮って来いといったらな、こいつを送ってきた。戦車の横にあるのは『せんとうへり』という物らしい。どういう

物かまでは分からなかったらしいが『たいせんしゃみさい』とやらが主兵装らしい。

フランスでこういったものについて聞いたことはあるか？」

「いいえ、残念ながら」

写真に写る『せんとうへり』を見ながら大神が答える。

航空機開発がようやく成長期に入ろうとしているこの時代にヘリコプターなどというものは概念すら存在していない。

「だろうな……ここから先は独り言になる」

つまり、大神は米田の独り言を偶然聞いたのであって、決して米田が故意に大神に教えたのではない、ということである。

古くから上官が信頼する部下に軍機を漏らす常套手段となっている手法である。

「もう暫くになるが、九十九里で銀座研究所が作ったという大型砲の試射があった」

「銀座研究所というと、今から向かう先の？」

「そうだ。偶然日露戦争の時の部下が誘ってきてな、行く事になったんだ。

着いてみると、陸軍の各師団や旅団、大隊なんかから佐官が集まってるよ、俺が着くと早速試射が始まったんだ」

「どんな砲だったんです？」

砲に興味がわいた大神が尋ねる。

「確か155mmだ」

「ひゃ、155mm！？またずいぶんどでかいですね」

「ああ、結果は大成功。三門の砲から放たれた砲弾は、正確に標的の廃棄漁船を捉えて粉碎した。こいつはそのとき現場にいた研究員だ」

次の写真を大神に渡す米田。

そこには何かを嫌がるような表情の鏡花に見られている長谷部が写っていた。

「この人は？」

「長谷部とかいう研究員だそうだ」

「だそうだって、違うんですか？」

「銀座研究所の佐藤大佐が言うにはそうらしい。だが、詳細は不明だ」

「詳細は不明って、人事部に行けば……」

「おめえが帰国したころな、いろいろと探らせてはいたんだが、全て失敗に終わっていたんだよ。」

何しろ、銀座研究所に関係したものは、一兵卒や業者の家族さえもが口をつぐみ、書類に到っては近くの商店の領収書さえもが軍機になっていたからな。

しまいにや参謀本部から命令書が来た。これ以上銀座研究所に無

用の警戒心を抱き、いたずらに軍内部の秩序を乱さぬようにな」

「それは・・・怪しすぎますね」

左手で写真を持ち、右手で顎をなぞりながら大神が唸る。

そこまで過剰な防諜体制と、あからさまな警告を行う理由がわからない。

「そこで直接訪問を？」

「そうだ、幾らなんでも俺の直接の訪問を追い返すほどの度胸はあるまい」

にやりとしながら米田。

「考えましたね支配人」

「まあな」

二人がニヤニヤしていると、運転手が告げた。

「見えてきました、銀座研究所です」

大神達の乗る公用車が銀座研究所に近づいてきたころ、朝から出かけていた岡村と斎藤は完成した零式重戦車の前にいた。

近くでは仕事を終えた溶接技師達がタバコを吸っている。

「たいしたもんだな」

黒光りする105mm砲を見ながら岡村が言う。

この時代に最新型野砲にも匹敵する主砲は見るものに多大な威圧感を与える。

「これだけの大きさ、これだけの重量にも関わらず時速50kmも出るって言うんだから驚きですよね」

装甲をなでながら斎藤。

「しかも105mm砲を余裕で跳ね返すって代物らしいじゃないか。これが一個師団分揃えばどこの国にでも勝てるぞ」

「そうですね」

「これと155mm砲、それに今作ってる零戦一型が出来れば、皇国の勝利は疑い無いな」

「そんなに強いのかい、この戦車は？」

突然後ろから声がする。

「誰だ!？」

聞きなれない声に振り向くと、そこには大神と米田、運転手兼雑用の少尉が立っていた。

「あんた達誰だ?どこから…….けっ、敬礼!!!」

問いただそうとして、米田の服装に気がついた岡村が慌てて敬礼

をする。

それに気がついた斎藤も敬礼をする。

「ちゅ、中将閣下。本日はどういったご用向きで？」

「視察だよ、こいつの質問に答えてやってくれ」

反応の変化を楽しみつつ米田が説明を促す。

「し、しかしこれは軍機でして・・・」

防諜規則を思い出しながら斎藤が言う。

「規則を守って俺に首にされるのと、秘密厳守を約束する俺に説明するのとどっちがいい？」

首は真っ平だが、規則を破っても良いわけが無い。

規則や法律に例外はあつてはならない。相手が例え中将閣下であってもだ。

しかし、職を失うわけにはいかない。

実際には、人事部に対する米田の発言力などたかが知れているし、小林少将や佐藤大佐がそんなことは絶対にさせないのだが、一介の研究者である斎藤や岡村にはそんな事は分からない。

分かるのは、目の前にいる中将を怒らせるのは、防諜規則を破る事よりも恐ろしいかもしれないと言う事だ。

規則を破った事はばれないかもしれない。米田中将やその隣にいる少尉、海軍軍人から漏れなければ。

だが、ひとたび中将を怒らせたならそこまでだ。下手をすれば『行方不明』にもなりかねない。

結局、気を利かせた工員達の退去も手伝って、岡村達は零式重戦

車の説明を始めた。

「この零式重戦車は、主砲として105mm砲を搭載しています。最高時速は・・・」

「105mm砲だって!？」

説明を始めた岡村を少尉が遮る。

かなり不快そうな顔で少尉を睨む岡村と斎藤。

ほとんど脅迫されての説明であるのに、よりによって出だしから邪魔をされたのがよっぽど頭に來たらしい。

「あ、す、すいません」

場に流れた険悪すぎるムードに気がついた少尉が謝る。

「説明を続けます。」

最高時速は約50km。総重量はおよそ39t。

同軸機銃一門、更に対空用として12.7mm機関銃一門を搭載しています。

105mm砲の直撃に耐えうる装甲を持ち、水深2m以上の渡河能力と自動発射式の煙幕弾六発も搭載しています。

通信機も当然ながら載せている我が軍の次期主力戦車です」

「その性能、どこまで本当なんだ？」

研究者の前では禁句といってもいい言葉を少尉が言う。

信じられないのも無理は無い、そんなもの作れるはずがない。

苦笑しつつ「実際のところは……」と言い出すのを待っていた米

田御一行は、怒りをあらわにした斎藤と岡村をみて押し黙った。

「失礼を承知で申し上げます」

少尉を睨み付けながら斎藤が言う。

「こちらの話を聞くつもりが無いのでしたら、即刻この研究所から退去してください」

明らかに怒っているその口調からこれ以上の情報は得られないと判断した米田は撤退を指示した。

「大神、ここは一度帰ろう」

「そうですね」

ひとまず考えなしの少尉を追い出して、誰かもっとましな人物を連れてこようと思いつきながら大神が答える。

「分かりました」

そ知らぬ顔で少尉言々と、三人は車の方へと引き返していった。

「あいつら、ふざけてるのにもほどがある」

走り去っていく公用車を睨みつけながら岡村が言う。

「しかしいいんですかね？あそこまで露骨な態度を示して」

不安そうに斎藤。

「いいんだよ」

いつのまにか現れた佐藤大佐が言う。
めっちゃくちや酒くさい。

「大佐、いつのまに？」

「今来た」

「大丈夫なんですか？ 相手は中将ですよ？」

斎藤の不安はなかなか消えない。

「あの失礼な少尉のおかげで、米田のジジイはこれからここへ来づらくなる」

酔っている割には真面目な顔をして大佐が言う。

「確かに・・・・・・・・まさか！」

頷いた斎藤が、はっと顔を上げ、佐藤の方を見る。

「そう、あの失礼な少尉は俺の部下だ」

「なるほど、中将の来訪を予測して、先手を打ったわけですね」

「ああ」

手にもったウォッカを飲みながら大佐が答える。

「よし、納得したところで酒だあ！」

ビンを振り上げた大佐が叫んだ。

数日後、大日本重工八王子本社の長谷部の卓上電話が鳴る。

「はい長谷部です」

「私だ」

「あ、これは大佐殿。どうしました？」

「発注していた小銃はどうなった？」

大日本重工は、従来のICラジオと軍用レーダー本体や部品に加えて、5・56mm弾や零式小銃（廉価版89式小銃）を製造しました。

これにより資金的余裕が出来た長谷部は、現在ある工場の隣に更に大きな第二工場を作らせていた。

「銃弾は、第一師団各部隊に配備する分は来週中には出来ます。

小銃の方なのですが、現在工作機械の量産に入りましたので、来週末か再来週の頭には生産数を倍に出来ます。どちらも納期には必ず間に合いますので、ご安心下さい」

「任せる」

「はい」

「戦車の製造は、第二工場が出来てからだよね？」

「はい。さすがに戦車は専用工場で無いと作れませんから」

「まあ、そこら辺も任せる」

「はい」

「ところで、今日電話したのは確認のためだけじゃない。実はな、ウチの研究員達が工場の一部を使わせて欲しいらしい。何とかならんか？」

「工場の一部ですか？いいですよ」

一瞬の間もおかずに答える長谷部。

それを聞いた鏡花は、工場の東側にかなり空きスペースがあるのを思い出す。

新型の工作機械が出来たらそこを使うのであろうと思っていた鏡花は、あらかじめこうなる事をわかってこういう配置にしたことを悟り、やはり長谷部は凄いと思う。

「悪いな」

「いえいえ、偶然工場に空きがあっただけですよ。それで、大介さん達は明日にでも来られるんですか？」

「ああ、明日朝一番でそちらに向かわせる事になっている。ナント

カ連動砲がどのとか言っていたな、わかるか？」

「はい、大体予想はつきました。それではまだ整理しなくてはいいけない書類があるのでこれで」

「ああ」

翌朝、大介達が持ってきたレーダー連動砲や1200馬力航空機用エンジンの設計図を見た長谷部は、自分達の行った事が予想以上の成果をあげていることに大いに喜んだ。

長谷部達による日本の技術力底上げは、予想外の急成長を見せ始めていた・・・・・・

第八話『零式戦闘機』

米田中将たちが佐藤大佐の策略によって銀座研究所を追いつけられ、それから数日後、長谷部の元を訪れた斎藤と岡村は、それぞれが考案した開発プランを携えていた。

岡村は海上自衛隊で使われていたCIWSをヒントにした『レーダー連動式対空高射砲』。

斎藤は製造だけは決定されている『零式戦闘機』用の発動機『誉一型（1200馬力）』である。

挨拶もそこそこに長谷部に自分達の開発プランを見せ、是非を問う。

二枚同時に設計図を渡された長谷部は、まず最初に斎藤のプランを見た。

「却下」

タイトルを見た長谷部は、いきなりそう言い放った。

「な、何ですか？」

あまりの素っ気無さに驚きながら斎藤が詰め寄る。

「三日も徹夜して書き上げた自信作です。1200馬力を問題なく出せる上に燃費や強度も問題ありません！更に丸一日かかって再計算や見直しを行いましたから、ミスがあるとも思えません！！」

しかし、長谷部は斎藤の主張を黙って聞いているだけだ。

「一体どこに問題があるんだ？」

横から見ている岡村が口を挟む。

「出力不足です」

再び、長谷部が口を開く。

またしても素っ気無い。

「出力不足、ですか？1200馬力もあるのに？」

「はい、せめてあと200・・・いや、300馬力は必要です」

「ま、待ってくださいよ。あと300馬力っていったら1500馬力ですよ？そこまで高出力な物となると、かなりの大きさになってしまいます。

それに実戦に耐えうる強度を持たせるとなると・・・」

文句を言おうとする斎藤を、長谷部は手で制した。

「斎藤さん、無理なことを可能にするのが我々技術者の仕事です」

斎藤が反論する。

「それは分かっています。ですが、技術者といえども魔法使いではありません。不可能な事は出来ません」

「もったもです。しかし、我々の世界では現に出来ています」

「それは未来だから・・・」

「柴田さんは、強固で大出力、かつ燃費に優れながらも小型で軽量の戦車用エンジンの開発に成功しました。

それに未来といわれましたが、貴方も技術指導は受けている筈です」

「それはそうですが・・・」

「それならば頑張ってください」

これ以上話す事は無いというように設計図を斎藤に戻す長谷部。受け取った斎藤は何か言いたげであったが、あきらめたように引き下がった。

「次に岡村さん。レーザー連動砲についてですが、問題ありません。早速連動高射砲の試作に入ってください。施設はウチの第弐工場の余剰スペースをどうぞ」

「ありがとうございます」

「それではお二方とも頑張ってください」

長谷部がそう言うのと、入り口付近に席がある鏡花が扉を開く。早い話が出て行けということだ。

「斎藤さん」

斎藤が退室しようとするのと、長谷部が声を掛けた。

「なんででしょう？」

少し不満げな口調で斎藤が答える。

さすがに自分の案があっさり没になるというのは技術者として納得がいかかったようだ。

「一つ、覚えておいてください」

「何をですか？」

かなり乱暴な発音で尋ねた斎藤に、長谷部は静かに答えた。

「我々技術者が一つ妥協をするという事は、その分戦場で大勢の兵士が死んでいく、という事をです。兵器開発を行う上で、この事は、常に忘れないで下さい」

つまり、コスト面から装甲を削る、あるいは時間的制約から馬力を減らすなど、何かしら妥協を行うという事は、その妥協によって生まれた弱点によって兵士が余計に傷つくということだ。

最も、それは兵器開発に限らず、何かを作る上で一番の基本である。

常に十分な時間と予算が用意されるわけではないにしても、与えられた条件の中でこれ以上は無いものを作るのが技術者の仕事であり、使命である。

「・・・わかりました」

それだけいうと、斎藤達は部屋を出た。

後日、斎藤から出された第二案は『1800馬力航空機用発動機』であった。

それをみた長谷部は笑顔でGOサインを出した。

昭和2年1月1日 大日本重工八王子本社

政府の資金援助を受け、八王子郊外の山間に設けられた大日本重工業八王子本社。

数十ヘクタールを誇る広大な敷地の中には、電子機器を中心に製造する第壱工場、零式重戦車及び零式小銃など、兵器を中心に製造する第貳工場。

そして、完成した兵器を一時的に収納するための倉庫群や、それらを管理する管理棟などが存在している。

管理棟前には、建設時に作業員が寝泊りしたバラックや資材置き場などを撤去したために出来た広い空き地があるのだが、今そこには、25両の零式重戦車が並べられている。

「人間やれば出来るもんですなあ」

第貳工場と第壱工場の間にある管理棟の窓からそれを見下ろしつつ山口が言う。

「まあ、『人間やって出来ない事は無い』と言いますからね」

元旦だというのに、白衣姿でなにやら難しい計算をしている長谷部が答える。

ガラスで仕切られた向こう側のオフィスでは、大介をはじめとした研究者達が忙しそうに走り回っている。

どうやら、ここには元旦を楽しもうという人間はいないらしい。

「そういえば、以前からここを警備していた憲兵隊の一部が帰還し

て、かわりに山口さんたちが来る事になったそうじゃないですか」

「そうなんですよ、長谷部さんや5121小隊の人たちがこっちに移ったのに、我々だけがここに残る必要は無いだろうって大佐が手を回してくれました」

「厄介払いかもしれませんね」

コーヒーを持ってきた鏡花が会話に参加する。

コーヒーを二人に渡すと、部屋の入口の近くにある自分の席に座る。

「長谷部技監。昨年から続けていたパソコン開発の件ですが、以前報告したCDに加え、ブラウン管の小型化に成功しました。」

またCPUを初めとした精密部品の限定製造を始めます。

当面は精度向上に時間を割かれると思われますが、遅くとも今年の夏までにはペンティアム？に匹敵する物を用意できると思います」

「ご苦労様です。OSはどうです？」

「技監のノートパソコンに搭載されていたのをそのまま流用という形になりそうです。ワードやエクセルなどもです」

「まあいいでしょう、ミスターゲイツの部下がこの時代まで追いかけてくるはずが無いですからね」

言いつつコーヒーを飲む。

一口飲むと同時に、口の中にコーヒーの香りが流れ込んでくる。

「うーん、やっぱり鏡花くんのコーヒーはおいしいね」

満足そうに微笑みながら長谷部が言う。

「技監にそう言って頂けると光栄です」

本当にうれしそうに鏡花が言う。

こうして見ていると、外見にあった『女の子』なんだがなあ、と、鏡花には聞こえないように呟く。

「技監、何か言いました？」

「いいえ？」

おもいっきりすつとぼけた顔をする長谷部。

それを見た山口は、長谷部が28歳という若さで技本の本部長に抜擢されてもおかしくは無いなと変なところで納得する。

「それと、昨年より行っているゼロ戦開発計画ですが、すでに試作一号機がロールアウトしました。」

陸軍航空隊より譲渡された基地航空隊三名及び整備班を早速専属に指定し、詳細なデータの収集に当たります。恐らくは今月末には小規模な増産体勢に移れるはずです」

「ご苦労様です。ゼロ戦開発計画は、我々日本人の意地がかかっています。最大限の努力をするように厳命しておいてください」

「わかりました」

「あと、人形峠の件なのですが、純度の高い物を生成しだい第八倉庫に輸送させています。ご命令があればいつでも製造できますが・・

・
」

「それに関しては、もう少し電子関連技術が向上してからにしましょう。どうせならば可能な限り高性能な物を使いたいですから」

「分かりました」

「ところで、厄介払いといいますと？」

地名以外は具体的な名前を一切出さない報告に自分の分を越えた物を微妙に感じ取った山口が話題を変える。

「我々を巡って米田という中将と佐藤大佐がもめていたのは前にお話しましたよね？」

「ああ」

「参謀本部に頼み込んで出してもらった命令書によって、中将はいったんあきらめたんですが、どうも最近また始めたみたいなんです」

コーヒーを飲みながら長谷部。

「昨年12月の警備報告によると、非常扉8箇所、明り取り窓3箇所で鍵の破損が発見されました。明らかに人為的なものだそうです。それと、資料荒らしの痕跡が何度か確認されています。それなりに技能のある人間の仕業と見て間違えありません」

「それと、こちらの世界の兵器の資料がいくつか紛失しています。ま、こんなものいくら盗まれても困りませんけどね」

試作の自分用パソコンを起動させながら鏡花。

「研究成果は私と長谷部技監がパソコンに記録していますから技術資料が流れる恐れはありません。」

銀座研究所との交信に使っている無線はデジタルなので盗聴の恐れはありませんし、電話では重要な話題は話しませんから外部への機密の流出は起こりえません」

「なるほど、それなら防諜に関しての懸念は無いわけですね？」

「はい。この研究者の皆さんは非常に協力的ですから、情報の横流しなどという事は起こらないでしょうし、そうならないように、防諜の専門家を十数名配置しています」

「それならば問題は無いですね。しかしパソコンですか、我々の装備が調達できるようになるのも近いですね」

腰に下げた九mm機関拳銃をさすりながら山口が言う。

「5. 56mm NATO弾や89式小銃、74式戦車なんかは既に生産ラインが確立するまでになっているんですがね、さすがに電子装備を用いる兵器となりますとね。」

「一から用意してやらないといけないですからどうしても時間がかかってしまいますね。」

「ま、焦らずじっくり行きましょう。既に高集積ICやクリーンルームの初歩などは出来上がっているんです、直ぐに平成と変わらぬ物をご用意しますよ」

「期待してますよ技監殿。さて、私は憲兵隊の皆さんに夜間歩哨の基礎でも教えてきますよ」

「お願いします。不審者は直ぐに無線で報告し、ばれないように包囲するよう、厳命して置いてくださいね」

「わかってますよ。ああそう、暗視ゴーグルの開発も忘れずにしておいてくださいよ」

「わかっていますよ」

にこやかに言う長谷部に手を振りながら山口は部屋を出て行った。

昭和2年2月にはいると、新型の航空機用エンジンである『誉一型』を装備した最新鋭戦闘機『零式戦闘機』は試作段階を終えて小規模な増産体勢に移っていた。

増加する航空機を運用するために、専用の格納庫や管制室、滑走路などが新たに建設された。

また、各地の陸軍航空隊から新たに大量の要員を獲得し、来るべき全国一斉配備に備えさせた。

「これが零式戦闘機です」

格納庫に収納されているゼロ戦の写真を見せるスーツ姿の男。照明を弱めている室内は、夕方である事も手伝って非常に薄暗い。

「全長は9.1m。全幅は12mあります」

「馬力は？」

執務デスクに陣取った男が尋ねる。

「1800馬力です」

「1800！？そんな高出力が出せるのか！その『誉一型』とかいう発動機は」

「そのようで」

「どれくれえ遠くまで飛べるんだこいつは？」

「およそ2500kmです。両翼に落下式増槽を付けた場合の航続距離は5000kmだとか」

「な、ななせんにひゃく・・・」

あまりに信じられない数値に思考がついていけない。

「しかし落下式増槽などというものまで開発するとは・・・どうも大日本重工は怪しいですな」

執務デスクの男が未だに再起動に苦戦している事に気がつかないスーツの男。

「武装は12.7mm機銃二門です・・・って聞いてます？」

なにやら考え込んだ様子のデスクの男に、スーツの男が尋ねる。

「こいつは一体なんだ？」

指差された写真には、輸送用トレーラーから整備テントに移動しようとしている士魂号が映っていた。

「さあ？どの作業員に聞いても知らない上に、正体がばれそうになったもので、写真を撮るのが精一杯でした」

「そうか・・・こいつ、脇侍や降魔とは似てもつかねえが、なんかひっかかるな。いちゃもんつけてひっぱってけねえか？」

写真を見ながらぼそりと呟く。

「・・・よし、第一師団から何個小隊か借りていく。早速準備に取り掛かる。大神達も用意させてくれ」

「わかりました」

スーツの男は一礼すると、部屋を出て行った。

第九話『零式重戦車』

昭和2年1月2日 AM2…40 大日本重工業八王子本社正門

正門横の詰め所で若い憲兵達が談話している。

全員自衛隊採用の迷彩服に身を包み、零式小銃と9mm機関拳銃を身につけている。

8畳ほどの部屋の中は3つの電灯によって明るく照らされ、常に受信状態にしてある通信機が低い音を出している。

「お前あの新型戦車みたか？」

ここの責任者である若い憲兵中尉が椅子に座りながら言う。

「ええと、零式重戦車ですよね？」

机を挟んで反対側に座っていた兵士が答える。

「そう、それぞれ。

いやゝ試験運用課の連中に頼んで乗せてもらったんだけどよ、凄いのなんのって、時速50kmは伊達じゃないな。

それにあの主砲！105mmだぜ？陸軍で使ってる野砲よりでかいってんだから驚きだよ」

「羨ましいです、自分も乗りたいであります」

「そのうち頼んでやるよ」

「ありがとうございます」

憲兵が頭を下げると同時に無線機が受信を知らせる。
直ちに近くにいたほかの憲兵が受話器を取る。

「正門横詰め所であります」

<私だ>

相手は佐藤大佐であった。

「たっ大佐殿!!」

思わず直立不動の姿勢をとる憲兵。

<まもなく“お客”が見える。抵抗せずに大人しく入場させろ>

「はっ！わかりました!!」

<以上だ>

用件だけ伝え、大佐はさっさと通信を切ってしまった。

「どうした？」

通信を受けた憲兵に中尉が尋ねる。

「佐藤大佐殿です。まもなく“お客”が来るが抵抗はせずに入場させるようにとのことであります」

「そうか、それでは一応臨戦態勢だけはとっておこう。総員配置につけ！」

「はっ!!」

中尉が命令を出すと、憲兵達は各々の持ち場へと駆け足で走っていった。

「まもなく正門ですが、どうしますか？強行しますか？」

助手席で拳銃に弾が入っていることを確認しながら中年の中隊長が尋ねる。

「まあまて、相手方の出方を見るほうが先だ。それに、強行したところはこちらに勝ち目は薄いぞ。なにせ相手には戦車が腐るほどあるんだからな」

正装に身を包んだ米田帝國陸軍中將が静かに言う。

「はっ」

「見えてきました、正門で・・・」

運転手が正門が見えたことを告げようとした瞬間、詰め所の上にある監視塔からサーチライトが当てられた。

あまりの眩しさに運転手が車を止めると、後続の輸送車も次々に停車した。

＜こちらは東京憲兵隊だ。そちらの所属と目的を知らせよ＞

拡声器で増幅された憲兵の声があたりに響き渡る。

眩しさに目を細めながら正門をみると、頑丈そうな門はしっかりと閉じられ、随所に土嚢が詰まれた上に明らかに頑丈に作られている詰め所の窓からこちらを狙っている憲兵達の姿が見える。

「中将閣下、いかがいたしますか？」

不安そうに中隊長が尋ねる。

「兵はまだ降車させるな。ここで銃撃戦を起こしても意味が無い。俺が向こうの憲兵と話をつけてくるからそこで待ってな」

そういつて車から降りる。

「い、いえ、自分もお供させていただきます」

幾らなんでも中将を一人で行かせるわけにもいかないので、中隊長も一緒に降りる。

その間に詰め所の横まで歩いていった米田は、年季を感じさせる大声を張り上げた。

「帝國陸軍中将米田だ！！この施設に帝都の平穩を脅かす恐れのあるものが隠されているという情報を得た。ただいまより強制捜査に入る！！」

中隊長に向かって兵を降ろすようにジェスチャーをする。

「総員降車！！整列！！」

トラックから次々に兵士達が下車し、中隊長の後ろで整列する。

「邪魔立てする奴は容赦しねえぞ！！」

更に気迫を込めて米田が叫ぶ。

実際には米田の独断で勝手に押しにかけているだけなのだが、年季を感じさせる気迫で叫ばれると正規の命令に基づくものなのかと思ってしまう。

「直ぐに門をあけねえか！！」

「分かりました」

あっさりと了承する中尉。

「へ？」

予想外の展開に目が点になる米田。

「大佐から話は通っています。どうぞお通り下さい」

「お、おう。わりいな」

首をかしげながら車に戻る米田。

中隊長に直ぐに部隊を車に乗せるように言う。

「しかしいいんですしょうか？」

管理棟へ向けて走り去っていく米田達一行を見送りながら若い憲兵が言う。

「大佐殿が通せて言うんだからいいんだよ」

詰め所に戻りながら中尉が答える。

「俺達の仕事は命令どおりに働く事だ。大佐殿は大佐殿の思惑があってご命令を下されたわけなのだから、貴様ごときがいちいち考えんでもいい」

「はっ！失礼致しました」

敬礼をする若い憲兵。

「わかったら本部に連絡しろ」

「はっ」

連絡を受け取った本部は直ちに警戒態勢へと移行した。

管理棟正面玄関前に零式重戦車が2両停車し、主砲に砲弾を装填する。

管理棟屋上にある機関銃座に兵士達が飛びつき、12.7mm機銃に弾倉を装着する。

サーチライトが次々と灯され、第壹第式工場と管理棟の周辺を明るく照らしだす。

「大佐殿、総員戦闘配置につきました」

憲兵隊長が椅子にふんぞり返っている佐藤大佐に報告する。

「よし、来ても撃たないように言っておけ。中村ア！」

佐藤が叫ぶと、中村伍長が慌てて横にやってくる。

中村が横にきたのを見ると、佐藤は高そうな葉巻を取り出した。

「・・・このボケェ！！」

一瞬の間の後、佐藤はいきなり中村を殴り飛ばした。

殴り飛ばされた中村は、何が起きたのかを察知する暇も無く床に倒れ伏す。

「い、いてえ、大佐殿！ いったいなにを・・・」

口答えしようとした中村の後頭部を大佐のブーツが押さえつける。

「俺が葉巻を出したら直ぐに火を出せと云っただろうが！！ まだわからんのか！？」

言いながらも中村の後頭部を踏みつける。

「大佐殿、“お客”はまもなく正面玄関前に到着する模様です」

通信士が言う。

「よし、ライトを当てて威嚇するように言え。だが、絶対に発砲させるな」

「はっ」

「か、閣下！戦車です！戦車があります！！」

正面玄関前に展開している零式重戦車2両を発見した中隊長が騒ぐ。

「落ち着け！いいからそのまま前進しろ。どうせ撃ってはこない！」

鋭く一喝する米田。

陸軍中将の自分が指揮する部隊目掛けての砲撃など、威嚇であってもするはずがない。

「は、はい！」

戦車に怯えつつも、米田の鋭い一喝に勇気づけられた一等兵がアクセルを踏み、いったん減速した先頭車両はそのまま正面玄関前に布陣している戦車の前まで進んでいった。

玄関前で停車すると、直ぐに後続のトラックから兵士達が下車し、正門の時と同じように整列する。

「一体これは何の騒ぎなんですか？」

自分のオフィスから表の騒ぎを目撃した長谷部が玄関から飛び出してくる。

その横には、いつのまにか迷彩服を身につけている鏡花もいる。

「おめえは確か長谷部研究員だな」

先頭車両から降りつつ米田が言う。

「貴方は確か帝國陸軍の米田中将閣下ですね？」

さりげなく腰につけたホルスターに手をやりながら鏡花が言う。

「中将？将官殿がこんな夜更けに何のようなんですか？」

研究所に対する一連のスパイ行為の親玉と思われる人物を前に長谷部も緊張する。

「ご存知の通り、ここは皇軍に兵器を卸させて頂いている民間の企業です。わざわざこのような事をせずとも・・・」

「能書きはいいい」

長谷部の言葉を遮る米田。

「ここに帝都の安全を脅かす兵器が隠されているという情報が入った。今から俺の部下達がここを調べる。邪魔立てする気なら逮捕する。」

さあ、これがあるところまで案内してもらおうか？」

米田は、キャリアーから整備テントに移される土魂号が映っている例の写真を長谷部に手渡した。

それを見た長谷部の顔色が微妙に変わる。

「どうした？案内せんのか？　しないならこちらで強制的にやってもいいぞ」

「分かりました。こちらへどうぞ」

倉庫群へと続く長い通用路を長谷部と鏡花が並んで歩いている。その後ろには完全武装の兵士5名と、技術士官と思われる小柄な兵士1人を従えた米田が歩いている。

「どうして案内なんかするって言ったんですか？」

後ろに聞こえないように鏡花が長谷部を責める。

「しょうがないでしょう。下手に強制捜査とかやられて、試作品を破壊されたり第8倉庫に防護服無しで立ち入られたりしたら大変な事になるんですから」

「そう言われてみるとそうですね」

「それに、警備室で鍵を取らずに行けば、向こうについてから鍵を取りに行く時間が出来ます。それまでに大佐が何とかしてくれましょ

「なるほど」

だが、鍵をわざと取りに行かないという長谷部の時間稼ぎは失敗した。

なぜならば、現在士魂号が収容されている倉庫では5121小隊による定時整備が行われていたからである。

「いいですか？土魂号というのは、ただ歩いただけでもどこかが故障する兵器なんです。日々の定時点検を怠るわけにはいけないんですよ」

鏡花に詰め寄られた三号機整備士の森は懨然としてそう答えた。

「だからって、あなた達のところにも警報は行っただけだよ」

「来ましたよ。ですけど、警報が発令されたからっていきなりやめられるわけじゃないんですよ！」

「それにしたってねえあなた！」

米田達は口喧嘩を始めた鏡花と森の事は無視して調査を始めた。

まず、武装した兵士2名が倉庫の外へ歩哨として立ち、残りの3名が要所所で監視の目を光らす。

次に、小柄な技術士官と米田が土魂号の足元へ行き、なにやら密談を始める。

初めは土魂号の足をぺたぺたとさわり、写真を撮ったりしていたのだが、次第に周辺へと関心が移ったらしく、積み上げられているコンテナや各所のハッチが開けられて整備されている装甲車の写真も撮りだした。

何枚か写真を撮ると、5121に専属でついている憲兵隊員の小銃に気づいた技術士官がなにやら米田と話し始める。

「長谷部とかいったな、ちょっとこいや」

技術士官と話していた米田が長谷部に手招きする。
直ぐに鏡花を従えて長谷部がやってくる。

「なんですか？」

「おまえさんたちは確か零戦とか言う新しい飛行機を作ってたよな？」

「そこまで調べたんですか・・・ええ、作ってますよ」

機密情報が駄々漏れの現状に呆れつつ長谷部が答える。

いくら参謀本部が厳命し、憲兵隊が随所に立とうと、相手が人間である以上はある程度の情報漏洩は避けられない。

分かってはいるが、いざその証拠を突きつけられると、覚悟していたとはいえショックは隠せない。

「名前は零戦でいいんだよな？」

米田が念を押す。

「そうですよ。正式名称は零式戦闘機ですが、それが何か？」

怪訝そうな顔の長谷部が言葉を返す。

「一つ聞きてえんだがよ、なんで零式なんだ？俺の持ってる情報が正しければ、零戦の名称決定は皇紀2584年（昭和元年）のはずなんだが」

米田の疑問はもつともである。

帝國軍の慣習に合わせるならば、零戦の名称は皇紀2584年の84を取って八四式戦闘機、もしくは4を取って四式戦闘機でなければならぬ。

仮にも軍の兵器開発者である長谷部がそんな事を知らない筈がな

い。

「あと、ここの憲兵達が使っている小銃や表の重戦車。あれも確か零式だよな?」

「はい」

内心しまったと思いながら長谷部。

まさか（日本の戦闘機はゼロ戦でなければ格好がつかない）なんて変なこだわりを持っていたからなんていうわけにもいかず、途方にくれる。

「あ、あのですねえ……」

冷や汗を流しつつ必死の弁解を試みる。

「零戦の名称が決定したのは昭和元年じゃないですか、だから元年にちなんで零戦と……」

「おい、それじゃおかしいぞ? 昭和元年っていったら昭和一年ってことじゃないか。そしたら名称は一式戦闘機だろ?」

いきなり墓穴を掘る長谷部。

再び作戦案を練り始めた彼に代わって、鏡花がその質問に答えた。

「それがですね、一式戦闘機だと略した場合に一式戦になっちゃうじゃないですか、それはなんとなく響きが悪すぎたので零戦と呼ぶことにしたんです」

周りで緊張しつつ聞き耳を立てていた5121小隊員や憲兵達が

（ナイスフォロー！！）と心の中で賞賛する。

「ふーん、なるほどねえ・・・あそこに積み上げられてるでかい箱は何だ？」

長谷部の態度に納得できない点を残しつつ質問を変える米田。

「コンテナです。中身は修理部品などです」

今度の質問には長谷部のよどみなく答えられた。

「特に見ても面白い物はありませんが、拝見され・・・・・・・・ちょっとまった！！どこへ行く気です！？」

他の倉庫へ向かおうとする小柄な技術士官に長谷部が声を張り上げる。

周囲には鉛の防護服を着ないと確実に死亡する倉庫や、電子部品の一時収納庫などもあるのだ。勝手に動き回られては困る。

長谷部の大声に驚いたのか一瞬動きを止める技術士官。

次の瞬間、技術士官から飛び出した声は長谷部たちの予想を大きく裏切る物だった。

「そんなに大きな声出さんと聞こえとるわ、ちょっと隣の倉庫をみしてもらおうかと思っただけや、そんなにカリカリしなさんなって」

特徴のある訛りを持つ声でそう言うと、振り向いて帽子を取る技術士官。

帽子の下から現れたのは、中華系の顔をしたそれなりに綺麗な女性だった。

「中華系？まさか共産党のスパイ！？中将！どういふことです！？」

驚いた長谷部が米田に詰め寄る。

平成では、既に中国は完全な共産主義に移行していたので長谷部が共産党と思うのも無理は無いが、第二次世界大戦の頃の中国では、それなりに資本主義者もいたのだ。

どっちにしろ、今の長谷部の思考は短絡的過ぎる。

「中華系というだけで共産主義者と決め付けるんじゃないやねえよ」

あっさり米田に叱られる。

「彼女は俺の身内だ」

「はあ、それにしても勝手に敷地内をうろつく事は止めてください。憲兵に射殺されますよ」

軽率な行動を取らないように釘をさす長谷部。

「隣の倉庫を見たいのならばそう言うてください。別に隠したりはしませんから」

鏡花が言う。

「それでは隣へどうぞ」

いつまでもこの倉庫を調査されては困る長谷部が、一行に表に出るように促す。

「技監、次はどこへ行くんです？」

さきほどと同じように米田達の少し前を歩きながら相談をする鏡花と長谷部。

「向こうは真面目に調査する気ですからね。一秒でも多く無駄な時間をすごしてもらうために、完成した兵器を貯蔵する倉庫をひたすら案内します。」

最低でも15分は稼げる筈です。あとは我らの大佐殿が彼らを追い出す何らかの手段を実行してくれる事を祈るしかありません」

隣にあるだけあり、少し密談をするだけで到着する。

入り口の衛兵に鍵を開けさせ、米田たちの方に向きを変える。

「さあどうぞ」

頑丈そうな扉を開く長谷部。

倉庫の中は照明がついておらず、天窓から月光が多少差し込む程度の明かりしかないために中の様子がわからない。

かすかに臭う油や金属の匂いから、ここが何らかの兵器を収容しているところだということは分かる。

「いったいここはなんなんだ？」

扉に首を突っ込んだ米田が言う。

多少月明かりがあるとは言え、真夜中の屋内だけあって、そこに何があるのかはわからない。

「ここは製造された零式重戦車の格納庫です」

扉の横に設けられた電灯のスイッチを入れながら長谷部。

スイッチが入れると、天井に設置されている強力な電灯が次々と灯り、巨大な倉庫の中を照らしていく。

「こ、こいつは・・・」

電灯が灯るたびに闇の中から浮かび上がってくる重戦車の群れに言葉を失う米田。

この時代の常識を遥かに超えた巨大な戦車の群れは、停車しているだけでも凄まじい威圧感を与える。

「以前銀座研究所でこれについての説明は受けた物と思われますので説明は省きますが・・・」

倉庫についての説明を始めようと長谷部が口を開いた途端、壁に設置されている警報装置が鳴り出し、いたるところに設置されている赤色回転灯が赤い輝きを放ちだす。

事態を把握しようと電話に飛びつく長谷部。

「こちら第一格納庫、長谷部です。本部の佐藤大佐をお願いします」

「少々お待ちを・・・どうぞ」

「佐藤だ。厄介な事になった。直ぐにお客を連れて管理棟に來い」

いつに無く声が緊張している。

「どうしたんですか？」

表情を引き締めながら長谷部。

「先ほど、施設北側の警備をしていた憲兵隊が所属不明の敵軍と接触した。別働隊がいる危険性もある。直ぐに戻ってこい」

「わかりました」

第十話『敵襲!』

独断で動かした一個中隊を率いて大日本重工の強制捜査に踏み切った米田。

将官の位を最大限に利用した結果、施設内に収容されている士魂号の強制査察に成功する。

5121小隊の誇る士魂号や整備中の装甲車を写真に収めた後、零式戦闘機命名を巡って長谷部の言動に妙な点を発見する米田。

皇紀2584年で昭和元年（一年）であるのに『零式』であるのは何故だと問われ、長谷部は答えることが出来ない。

まさか長谷部個人の趣味でゼロ戦がいいからなどと言う訳にはいかないからだ。

鏡花の機転のおかげでその場は潜り抜けることに成功した長谷部は完成品の倉庫などを適当に巡って時間を潰し、佐藤大佐が追い出すのを待とうと企む。

ところが、事態は予想外の展開を見せた。

完成した零式重戦車の格納庫を査察している時、基地中に警報が鳴り響いたのだ。

電話で演習ではない事を確かめた長谷部は、万が一に備えるために戦車を守りを固める管理棟へと戻る事にした。

「ああっ！お待ちしておりました！！」

管理棟にたどり着くと、例によって痣だらけの中村が一行を迎えた。

先頭を歩く長谷部の前で立ち止まると敬礼をする。

「長谷部さん、大佐殿が直ぐに本部へ来るようにとのことです」

「分かった。現状は？」

答礼しながら長谷部が尋ねる。

「最初に接触した憲兵達は手持ちの弾薬が減ったために後退したそうです。現在、周辺の憲兵をかき集めて西側倉庫街で交戦中です」

「敵は何者なんだ？」

「わかりません。かなり情報が乱れ飛んでまして。最初の報告では巨大な人型兵器と言っていました」

「巨大な人型兵器？巨大って言うのと士魂号くらいか？」

「さあ？まあ混乱していた上に今は夜中ですからね。具体的な大きさなどは不明です」

それを聞くと、長谷部はしばらく考える顔をした。

「まあいいや、車両は出すのか？」

「はい、間もなくトラック3台と零式重戦車3両がここから現地へ向かう筈です」

中村がそういった途端、管理棟の向かいにある倉庫から大型の兵員輸送トラックが3台、その隣の倉庫からは零式重戦車が3両、共にディーゼルの唸り声をあげながら出てきて長谷部たちの近くに停

車した。

すると、管理棟の中から完全武装の憲兵達が次々と踊り出て、トラックに乗り込んでいく。

「急げ急げ急げ！！もたつくんじゃない！！」

指揮棒を振り回し、唾を飛ばしながら兵士達に指示を出しているのは山口伍長だ。

僅か1分半で搭乗を完了すると、部隊は直ちに前線へと向かっていった。

「ずいぶんと訓練されているじゃねえか」

感心した米田が褒める。

「恐れ入ります」

いつのまにか中村の後ろに立っていた佐藤大佐が頭を下げる。

「たっ大佐！いつの間に！？」

驚く中村。

「たった今来たところだよ。中将閣下、ここは危険です。直ぐに管理棟へお入りください」

「わかった。大佐、私の部下の大神中尉を本部とやらの置いてやってくれ。若いわりに有能だ。きっと役に立つだろう」

「・・・わかりました。それではこちらへ」

昭和2年1月2日AM3…28 大日本重工管理棟内 総合警備室
通称『本部』

＜こちら村田！増援は、増援はまだですか！？手持ちの弾薬が少なくなってきました！このままでは戦線を支えきれません！！＞

絶え間なく鳴り響く銃声をBGMに、若い憲兵の声が劣勢を伝える。

「先ほど増援部隊が出動しました。まもなくそちらへ到着する筈です！」

＜了解、なんとか頑張ってみます。通信終わり！＞

「施設内各所の警備も強化させろ！訓練を受けた事がある作業員にも銃を持たせるんだ！」

オペレーターや先任士官の怒号が乱れ飛ぶ本部に佐藤大佐たちが到着する。

「現状は！？」

「はっ！現在戦車3両を主軸とする増援部隊が現場へ急行しております。まもなく到着するはずです」

敬礼をしつつ答える先任。

「5121小隊は？」

「既に実働体勢に移っています。現在三号機が出動し……」

DOM! DOM! DOM!

頑丈な壁に囲まれた室内に、戦車砲の砲声が響いてくる。

一瞬にして本部内の全員が黙る。

あの強力な零式重戦車が必要になるような敵が、すぐそこに出現したと言う事実を再認識したからである。

「どうやら増援が到着したようだ。見に行くか？」

大佐がにやりとしながら大神に言う。

「見せていただけるのでありますか？」

部屋中にあるさまざまな電子機器を興味深そうに見ていた大神が尋ねる。

「ああ、直ぐに用意させる。第二波と一緒に言って来い。中村ア！
」

「はっ！」

いつのまにか完全武装になって大神の横にいた中村が慌てて敬礼する。

「第二波と一緒に大神中尉も連れて行け」

「わかりました。中尉殿、こちらへ」

直ぐに大神を正面玄関へ連れて行く中村。

そこには既にエンジンをかけて兵士達を満載した輸送トラックが待機していた。

そのトラックは、今までのとは違いやけに巨大だった。

「お疲れ様です中村三曹殿。直ぐに出せます」

息を弾ませた中村が助手席側のドアを開けると、ハンドルを握った坂田が笑顔で待っていた。

ちなみに、自衛隊員たちは自分達しかいないときには基本的に元の階級で呼び合うことにしている。

「伍長だ。佐藤大佐の命令で大神中尉殿も同乗する、直ぐに出せ」

素早く訂正した中村は、大神を引っ張り上げながら乗り込む。

「直ぐに出せ」

「わかってます」

アクセルを踏み込む坂田。

「3時の方向に目標、撃え!!!」

戦車長が号令を出すと同時に105mm砲が砲弾を発射する。砲弾発射に伴う閃光が暗闇を切り裂いて周囲にあるものを映し出

す。

この時代に存在するありとあらゆる車両を確実に打ち抜くことが出来る105mm砲弾は、倉庫の影から出てきたばかりの機関砲を構えた敵人型兵器の上半身を吹き飛ばし、一瞬で戦闘不能にする。

「目標撃破！！次弾装填！！」

「装填完了です！」

既に砲弾を装填していた装填手が叫ぶ。

それに頷きながら戦車長が命令する。

「方位そのまま、撃え！！」

再び辺りを閃光が照らす。

着弾した敵人型兵器が爆散するのが見える。

「戦車隊に遅れをとるな！撃て！！」

日々指導を受けている憲兵達から『鬼の山口』とあだ名されている山口が叫ぶと、歩兵部隊による一斉射撃が始まった。

山口と一緒に出動した第一陣は、三種類の武装を持った兵士達で構成されていた。

戦車を盾にしつつ最前列にいるのが零式小銃を構えた小銃部隊。

その後方にある倉庫の陰から敵を狙う試作の式式対戦車砲を装備した対戦車部隊。

そして、対戦車部隊から少しはなれた空き地で筒状の装備を次々と準備しつつ敵が倉庫街の外まで押し出された時に備えて待機している最新型の81mm迫撃砲を装備した迫撃砲部隊である。

3段構えの布陣ではあるが、個々の部隊の人数は最低限以下の定員割れ状態であり、彼ら憲兵隊があくまで警備の為に駐屯していたのが分かる。

もちろん、それだけしかないのには理由がある。

数十ヘクターもある大日本重工防衛の為に駐屯しているのであれば、最低でも4から5個中隊がローテーションを組みつついなければならぬ。

しかし、憲兵隊からそれだけの戦力を割くわけにはいかないのだ。そのため、現在の大日本重工には重要施設の重点警備の為に3個中隊がいるだけとなっている。

さて、出現した敵の名前は脇侍乙型。

人型の上に機関砲を装備している厄介な奴である。

個々の戦闘力ならば零式重戦車には遠く及ばないのだが、なにしろ数が違う。

なんと、その数40機。

いかに優秀な兵器を持とうと、これだけの戦力差は覆しづらい。

おまけに倉庫に被害を出すわけにはいかないので、こちらは敵が倉庫から離れたところを撃つしかないのだが、相手はそんな事構いなしに機関砲を乱射してくるのだ。

しかも、倉庫街を舞台にしたいいわゆる市街戦のために巨大な戦車では小回りが効かず、ちょこちょこ動き回る脇侍の動きに対処しきれない。

そのための歩兵部隊なのだが、式式対戦車砲は確実な一撃を与えられるのだが、試作品を引っ張り出してきただけあって数が少ない。81mm迫撃砲は倉庫街で使うような物では無いし、当然の事ながら零式小銃は牽制程度の役にしか立たない。

かといって相手もこちらへ決定打を与えるほどの火力は持っていない。携行している機関砲はせいぜいが零式重戦車の装甲をへこませるくらいだ。

と、いうわけで、憲兵隊は相手に少しずつ損害を与えつつも大打撃は与えられず、かといって敵はこちらに対してたいした損害を与えずにいながらその戦力をじわじわと削られるという、なんとも見えてイライラする状況になっていた。

そんなところへ大神を連れた第二陣が到着したのは、午前4時を回った頃であった。

「総員下車！先任の山口伍長の指示に従え！！」

後部への覗き窓から中村が叫ぶ。

命令を受けた憲兵達は、武器を構えながら次々と下車して戦闘を続ける第一陣へと参加していく。

「やるもんですね」

被弾率を下げるために身を屈めているのにもかかわらず、瞬く間に倉庫や戦車の陰に展開を完了する憲兵達を見て大神が賞賛する。

本来は陸戦が主任務では無いのに、ベテランの兵士と比べてそれほど遜色のない動きを行っているからだ。

「ありがとうございます。このトラックの中でご見学ください。一応、窓は防弾になっているので。坂田、行くぞ」

小銃に装填しながら中村が言う。

「了解です」

運転席のドアを開けながら坂田が答える。

同行を申し出ようとして、自分が正装である事に気がつく大神。

「現状はどうなってるんです!？」

次々と機関銃弾が着弾する戦車の陰に飛び込んだ中村が山口に叫ぶ。

「完全に膠着している! 敵の数が多すぎる! 今若い奴等に倉庫の上へ登らせている!」

敵部隊が一番多くいると思われる正面にある倉庫を指差す。
倉庫の屋根の上を数名の憲兵達がよじ登っているのが見える。

「上から手榴弾の雨ということですか？」

「そうだ………っておい、どうして海軍がこんなところにいる?」

「へ?」

間拔けな声を出して坂田が振り向くと、いつのまにか後ろには大神が来ていた。

「あ、あんたいつの間に」

「すみません」

「まあここまできちゃったら追い返すわけにもいかないんでしょうがないですけど」

あたりかまわず着弾する銃弾の嵐を見ながら中村が言う。

<こちら杉浦。山口伍長へ。配置完了。いつでも出来ます>

そばにあった携帯式の個人用通信機からいきなり雑音の極めて少ない声が聞こえてきた。

「!!」

デジタル通信技術の事など当然知らない大神が仰天する。

「よし！五分後に始めろ！」

通信機に飛びついた山口が叫ぶ。

<はっ！>

「全員に告ぐ、今から五分後に総攻撃を開始する。対戦車部隊は前へ。攻撃と同時に戦車隊も前進させる。これでけりをつけるぞ」

<了解!!!>

「なあ中村伍長」

大神が中村を呼ぶ。

「なんですか？」

戦車の陰から相手を伺いながら中村が答える。

「あの通信機なんだが、一体どういう・・・」

「申し訳ありません大神中尉殿。技術的な質問には答えられません。自分は一介の兵士なので」

あらかじめ決められている答えを返す中村。

「それは分からないからか？それとも答えてはいけないからか？」

「自分には機械に関する知識は無いからであります」

「そうか」

当たり前といえば当たり前の答えを返されて黙る大神。
もっとも、隠す気があるうとなかろうと中村はデジタル通信の原理を知らない。

「誰かこれについて詳しく知っているものは・・・」

「中尉殿！」

通信機について大神が尋ねようとした時、山口が非難の声を上げた。

「銃撃が収まっているとはいえ現在は戦闘中です。その手の講義を受けたければ戦闘終了後に長谷部さんにでも思う存分受けてください」

「あ、ああ、すまない」

自分のあまりの緊張感の無さを恥じる大神。
どうやら、幸せな家庭生活というものを少し送るだけでも人間と
いうものは変われるらしい。

「いいんですか？あとで大佐に怒られても知りませよ」

山口のそばに寄ってきた中村が小声で言う。

「安心しろ。どうせ殴られるのはお前だ」

にやりとして言葉を返す山口。

「ほれ、戦闘が始まるぞ。さっさと持ち場に就け」

小銃で中村のわき腹を突つつく。

「畜生、いつか殺してやる」

同日AM4…30

「始めろ」

山口が指示を出すのと同時に倉庫の上に潜んでいた憲兵達が手榴
弾を次々と落とす。

牽制の為に放たれる戦車砲や機銃の為に身動きが取れない脇侍た
ちは次々と爆風に飲まれていく。

「やった!!」

「万歳!!」

歓声を上げる兵士達。

しかし、彼らは忘れていたのだ。敵が人間ではない事を。

「戦車前進! ロケット砲前へ!!」

戦車の陰から小銃を乱射しながら山口が叫ぶ。

直ちに戦車3両がその巨体を震わせながら敵集団へと進んでいく。

「装填しだい発砲! 倉庫に当てるなよ!」

「わかってる!!」

そんな事を口走りながら対戦車砲を構えた兵士達が飛び出し、手ごろなところにしゃがみこむ。

素早く後ろに回りこんだ相方がロケット弾を筒に装填し、発射筒を構えている兵士の後頭部を叩く。

装填完了の合図である。

合図を受けた兵士は、倉庫と倉庫の間を慎重に狙って発射する。

「おおっ!」

次々に放たれるロケットの光を見た大神が驚きの声を洩らす

誘導装置など当然付いていないロケットは、可能な限り真っ直ぐ突き進み、敵がいると思われる爆煙に突き刺さる。

次の瞬間、戦車砲に匹敵する爆発が連続して起きる。

「ざまあ見やがれ!!」

1番敵の近くにいた戦車の影から一人の兵士が飛び出し、煙に向かって叫ぶ。

「おい貴様!死にたいのか!もどれ!!」

顔色を変えた山口が叫ぶ。

「だいじょうぶですよ伍長殿、あの爆は……」

彼はそこまでしか喋れなかった。

いきなり煙の中から飛び出してきた機関砲弾によってバラバラに引き裂かれたからだ。

「……おい、嘘だろ」

煙の中から次々と出てくる敵機を見た山口は思わずそう洩らした。徐々に煙が薄くなったのはつきりと見えたのだ。

最前列の不運な数機の残骸を乗り越えて次々と敵機がこちらへ向かってくる姿が。

「は、班長?どうするんですか?」

早くもパニックになる中村。

相変わらず非常時には役に立たない。

「小銃は効かない。手榴弾も駄目。ロケットとやらも効果は薄い。戦車砲では限界がある。どうするんだ?」

大神が冷静に尋ねる。

「くそ、一体どうすれば・・・・・・・・ん？」

不意に地面が揺れている感じがした山口が黙る。

「地震か？」

再び起きた揺れに、大神も黙る。

微震は数度続き、唐突に止んだ。

「収まったようだが、一体何なんだ？」

山口がそう呟いた次の瞬間、一時的に砲撃を中止していた憲兵隊と敵の間に、巨大な人型兵器が1機、倉庫の間からジャンプで飛び出してきた。

その人型は、何が起きたのか山口達が認識する前に、腕に持っていた凶悪なまでに大口径な機関砲を乱射し始めた。

直線状にいた敵機を全てスクラップに変えると、その人型は大きさに合わないスピードで走っていき、倉庫と倉庫の間に潜む残的の掃討を始めた。

近距離すぎて使えない機関砲を投げ捨てると、巨大な右手を振り上げ、凄まじい速度で敵機へと叩きつける。

殴られた敵機は、反動で後ろの仲間達を巻き込みながら吹き飛ばされていく。

素早く他の敵機が機関砲を構えるが、続けざまに放たれた左足のローキックが下半身を吹き飛ばす。

そのまま上体だけをひねり、再び右手でパンチを放つ。

人型の出現からきっかり1分後、30数機いた敵機は1機残さずスクラップと化した。

同日AM6:30

「どうした？浮かない顔をして」

バックミラーに映った大神の顔に気づいた米田が声を掛ける。

「いえ、少し考え事を」

「・・・まあ、あんまり考えすぎんようにな。来週からは海軍軍人としての仕事が待ってんだからな」

「はい」

「ま、早くグリシーヌさんだったかな？のところに帰ってやることだ」

「はい」

返事をしつつも大神は戦闘中に見た人型兵器のことを思い出していた。

（あれだけ大量の脇侍が何故あそこに？それと、途中で現れた味方の人型。あんなに冷たい感じがしたのは久しぶりだ・・・一体、奴等はあそこで何をやっているんだ？）

考え事続ける内に、彼の意識はどんどん自身の内側へと入り込んでいく。

知らず知らずのうちに、彼は、居眠りをしていた。

「大神！」

「はっ、はい！」

米田の大声に慌てて返事をする、いつのまにか車は大神の自宅の前に来ていた。

「何時まで寝ている気だ？早く降りろ」

呆れ顔の米田が言う。

「も、申し訳ありません」

「いいから降りろ。かみさんが呆れてるぞ」

「え？は、はい。すいません」

慌てて車から降りる。

大神を降ろすと、車はさっさと行ってしまった。

「大神、車から降りずにぼーっとしているなんて、どうしたんだ？」

心配そうにグリシーヌが尋ねてくる。

ちなみに、今日は着物姿である。

いつも本国と同じ服を着ているのも芸がないといって買ってきたものである。

しかし、着物ともなると当然ながら体のラインが結構出てしまうわけで、目のやり場に困ってしまうわけなのである。

「具合でも悪いのか？」

「い、いや、寝不足なだけさ。少し寝れば治るよ。それよりおなかですいたな」

「そうか、すぐに用意する」

「うん」

二人肩を並べて家に入っていく。

「これが、今回襲撃してきた敵の残骸です」

回収された敵機の残骸を調査していた長谷部が、資料とかかれた箱に入れられていた金属片を佐藤大佐に渡す。

渡された大佐は暫く金属片をいじっていたが、やがて興味を失ったのか箱に戻した。

「戦力増強の件は許可が下りた。第一師団から新たに三個中隊が編入される。これで文句なからう？」

「はい。例の中将閣下と中尉ですが」

「ああ、あの二人は少しまずいんだ」

「政治的な問題でも？」

「ある意味な。米田は日露戦争の英雄なんだ。当然ながら信望者は多い。」

もう一人の海軍中尉は帝都と巴里を救った英雄だ。単純に圧力を掛けようとしただけでは無理だ。どこかで妨害される」

「しかし、これ以上ちよっかいを出されたのでは・・・」

不満を口に出そうとした長谷部を手で制す大佐。

「分かってる。安心しろ。中将の手駒である中尉殿は今週一杯は休暇だ。」

そして、来週からは海軍に新設される『先進技術研究局』に飛ばされる。当分は設立の準備や挨拶回りで何も出来ないはずだ」

「なるほど、それで中将殿は？」

「あいつは無理だ。少なくとも俺が中将か大将になるまではな。狐と狸の化かしあいをしようにも、相手に獵師がついてるんじゃ勝負にならないからな」

「小林准将閣下は？」

「あいつには統合幕僚会議開設の準備をしてもらってる。余計な仕事は増やしたくない」

「なるほど、確かに仕方ありませんな」

「ま、警備強化とかいって施設への出入りは全面禁止にさせておく。」

それでよかろう？」

「はい。いつもありがとうございます」

頭を下げる長谷部。

「時に長谷部君、君は以前対中国戦において有効かつ効果的な戦略があると言わなかったかな？」

「この間酒を飲んだ時ですね。ええ、言いましたよ」

「詳しく、話してくれないかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3352y/>

帝國自衛隊

2011年11月8日07時13分発行